慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「友愛amitié」と「名誉honneur」：パリ和約(一二二九年)をめぐる紛争処理の構造(二・完)
Sub Title	Amitié et Honneur : les méchanismes de règlement des conflits, à travers le Traité de Meaux et le Traité de Paris en 1229 (2)
Author	薮本, 将典(Yabumoto, Masanori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.11 (2012. 11) ,p.31- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20121128-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「友愛 amitié」と「名誉 honneur」：パリ和約（一二二九年）をめぐる紛争処理の構造（二・完）

薮本将典

一　はじめに
二　分析系としての紛争研究・儀礼研究と「紛争処理 dispute processing」
（一）紛争研究の枠組み
（二）儀礼研究の枠組み
（三）法人類学の枠組み
（四）法制史における相同性
（五）小　括
三　モー和約における紛争処理の構造
（一）和約締結への胎動
（二）和約締結の経緯
（三）和約の概要
（四）小　括……（以上、八五巻十号）
四　パリ和約における紛争処理の構造
（一）和約の締結儀礼
（二）和約の概要
（三）和約締結後の経過
（四）小　括
五　総　括……（以上、本号）

四　パリ和約における紛争処理の構造

（一）和約の締結儀礼

引き続き『年代記』によれば、最終的な国王の親裁を仰ぐべく、会談の場がパリに移されたが[115]、このパリでの会談の模様を伝える史料は現存しない。既存の証書史料からは、パリにおいて諸々の和平条項がフランス国王ルイ九世・教皇特使ロマヌス・トゥールーズ伯レモン七世によって認証された後、一二二九年四月一二日付で、ルイ九世[116]・教皇特使[117]・レモン七世[118]、各々の名義で所謂「パリ和約」の証書が作成されたという事実が確認されるにとどまる[119]。他方、和約の認証・締結に際して行われた、レモン七世の悔悛・赦免の儀礼については、レナルディ編『教会年代記集成 Annales ecclesiastici』（一六四六年～一六七七年）所収のグレゴリウス九世文書および先の『年代記』に記述[120]が見られ、その概要は以下の通りである。

一二二九年四月一二日、破門宣告に悔悛を示す罪人として衣服を剝ぎ取られたレモン七世は、肌着と下穿き姿で裸足のまま、ルイ九世、教皇特使、ポルト司教枢機卿兼駐英教皇特使コンラート、サン＝ニコラ＝イン＝カルケレ＝トゥッリアノ教会助祭枢機卿兼駐ダキア教皇特使オットー、サンス大司教、ナルボンヌ大司教、パリ司教、オタン司教、ニーム司教、マグローヌ司教、トゥールーズ司教、および国王の全廷臣が参集したパリのノートル＝ダム大聖堂の正面入り口前の広場に引き出され、和約を読み上げたうえで、彼らの立会の下で和約の全条項を遵守すべきことを宣誓した後、教皇特使ロマヌスがレモン七世を大聖堂内に導き入れ、大祭壇の下まで連れて来たところで、レモン七世とその場に居合わせたレモン七世の朋友一同の破門を解き、同日付で以下のような赦免状を発している。

【一二二九年四月一二日付の教皇特使による赦免状[121]】

・故トゥールーズ伯の息子レモン（七世）は、長きにわたって教会と国王に逆らって来たが、遂に教会と国王の命に従うに至った。

・かの者は恭しく敬虔な態度で、自らの赦免と裁きではなく寛仁を求めて教皇特使と国王の元までやって来て、聖木曜日[122]にはパリのノートル＝ダム大聖堂の門前にて、彼等の立会の下で自らが破門される原因となった点に対する教会と国王の命令に完全に従う旨を厳粛に宣誓した。

・こうした恭順な態度と敬虔さに鑑みて、教皇特使は教会のしきたりに従って赦免を与えることとし、かの者がその遵守を約束し、あるいは和約書面に定められた条項にひとつでも違反するか、それらの条項を実行に移さない場合には、かの者の同意に基づいて即時に破門が宣告され、赦免以前の状態に戻されると共に、かの者（レモン七世）およびその父親（レモン六世）に対して公会議の場で、あるいはそれ以後に宣告された諸々の罪に再び問われることとなる。

かくてレモン七世は、一二〇九年六月に父伯レモン六世がサン＝ジルで受けたのと同様の悔悛・赦免儀礼を受けたと推測されるが、その詳細は、ピエール・デ・ヴォー＝ド＝セルネーの『アルビ十字軍史 Historia Albigensium』（一二一三年～一二一八年）の記述[123]、およびカテルによる『トゥールーズ伯列伝 Histoire des comtes de Toulouse』（一六二三年）所収の一二〇九年六月一八日付の証書[124]によれば、次のようなものであった。

教皇特使ミロンは、アルル、エクス、オーシュの大司教、マルセイユ、アヴィニョン、カヴァイヨン、カルパントラ、ヴェゾン、トロワ＝シャトー、ニーム、アグド、マグローヌ、ロデーヴ、トゥールーズ、ベジエ、フレジュス、ニース、アプト、システロン、オランジュ、ヴィヴィエ、ウゼスの各司教[125]を伴って、サン＝ジル大修道院付属教会前広場に赴くと、広場には祭壇が据えられており、祭壇の上には聖体と聖遺物の数々（キリストが磔にされた十字架の木片など）が

置かれている。そこに、上半身を露わにしたレモン六世が導かれ、皆の前でこれらの神聖物にかけて、破門事項に関する教会のあらゆる命に従う旨を宣誓する。長衣を首までたくし上げたレモン六世は、教皇特使によってその長衣をつかまれ、自由を奪われた状態で鞭打たれた後、教会内に導き入れられ、赦免を与えられた。

レモン七世の悔悛と赦免に関する『教会年代記集成』および『年代記』の記述には、こうした鞭打ちや聖遺物等に関する記述は見られないが、同様の式次第を経たと目される。[126]

（二）和約の概要

かくして、トゥールーズ伯レモン七世の悔悛と赦免の儀礼の一環として認証・締結されたパリ和約の概要は、以下の三十二項目に大別される。[127]

【§1】[128]

レモン七世は、サン＝タンジェロ助祭枢機卿たるロマヌス教皇特使に、ローマ＝カトリック教会とフランス国王およびその後継者達への生涯変わらぬ忠誠を誓うことを約束する。

【§2】[129]

レモン七世は、領内の異端を一掃すべく、苛烈な追及の手を緩めることなく、近臣・封臣・親族・朋輩の所領についても同様である。また、王領となるべき土地からの異端の排除にも助力する。

【§3】[130]

レモン七世は、異端であることが明らかとなった者は即座に断罪すべきこと、伯の徴税官による異端者（異端の嫌疑のある者や同調者、支援者を含む）の捜索は、情け容赦なく行われることを約す。

また、伯はこれらの活動を支援すべく、異端者の逮捕に協力した者には、かの者が現地の司教あるいは所管する当局によって異端者であると宣告されていることを条件に、今後二年間は銀貨二マルク、その後は銀貨一マルクを支払うことを約す。

さらに、複数の異端者が逮捕された場合には、各々につき同額を支払う。異端者であることが明らかでない者、即ち同調者・支援者・隠匿者の措置については、教皇特使の命に従う。

【§4】[131]

レモン七世は、所領あるいは今後領すべき土地において当該和約を遵守し、あるいは遵守させ、今後王領となるべき土地においても、その遵守に助力する。

傭兵崩れのやくざ者は、これを追放・処罰すると共に、彼等を保護した者についても同罪として処罰する。

【§5】[132]

レモン七世は、教会と聖職者に手厚い保護を与え、彼等の諸特権が侵害されないようにする。さらに、教会の権能が侮られることのないよう、教会の破門宣告が遵守されるよう努める。

一年以上、破門宣告を頑として受け容れない者については、伯は教会の命に従い、かの者の動産および不動産を差し押さえることによって正気を取り戻させ、かの者が破門されるに至った事情を改め、その結果生じた損害を贖うまで、伯はそれらの財産を保持する。

【§6】[133]

レモン七世は、現職および将来の徴税官に対し、上記の条項を遵守する旨を宣誓させる。また、徴税官が上記条項に違反した場合には、財産没収をもって処罰する。

伯の領内における徴税官には、カトッリク信者を任命し、ユダヤ人および異端の疑いのある者は排除される。ユダヤ人および異端の疑いのある者は、都市・村落・城砦・関所に割り当てられた税を徴収することはできず、もしこれらの者が、偶然あるいは不注意によって任命された場合には、解任のうえ前述の財産没収をもって処罰する。

【§7[134]】

レモン七世は、教会および聖職者がアルビ十字軍以前に有しており、その後略奪されたことが明らかとなった不動産ならびに諸権利を全て即座に返還し、あるいは返還させることを約す。

その他、当該事実に争いのある事案については、これを常設裁判所あるいは教皇特使、教皇特使または聖座の代理人の裁判権に委ねる。

【§8[135]】

レモン七世は、今後十分の一税を全額支払い、あるいは支払わせることを約す。このことは、騎士その他の俗人についても例外ではなく、彼らが伯の所領あるいは今後伯領となるべき土地において十分の一税を徴収するということは認めず、それらは教皇特使あるいはローマ＝カトリック教会の意向に従って、全て教会に返還される。

【§9[136]】

レモン七世は、教会および聖職者に与えた損害の賠償として、動産および建物・家屋の破壊については銀貨一万マルクを支払い、不動産については上記の通り返還とする。

伯は賠償に関する一切を、教皇特使あるいはローマ＝カトリック教会が選任した善良で信頼がおける確かな人々に委ね、彼らが専門家の意見と共に上記の総額を損害に割り当てるが、上記に定める金額を超える損害額を請求されることはない。

【§10[137]】

シトー会大修道院（銀貨二千マルク）、クレルヴォー大修道院（同五百マルク）、グランセルヴ大修道院（同一千マルク）、ベルペルシュ大修道院（同三百マルク）、カンドゥイユ大修道院（同二百マルク）への支払いは、動産に対する損害の賠償であるばかりでなく、レモン七世の魂の救済のために行われる。

【§11[138]】

教会と国王の安全確保のため、国王が今後一〇年間保持すべきナルボンヌ城館をはじめとする城砦（後述§30）の

防衛強化のため、レモン七世は銀貨六千マルクを支払う。

【§12[139]】

以上、総額銀貨二万マルクをレモン七世は四年間かけて、年に銀貨五千マルクを支払う。

【§13[140]】

神学教師四名、教会法教師二名、自由学芸教師六名、文法教師二名に対し、トゥールーズにおいて教鞭を執るために銀貨四千マルクを以下の方法で割り当てる。

・神学教師：銀貨五〇マルク×四名を一〇年間（＝銀貨二千マルク）
・教会法教師：同三〇マルク×二名を一〇年間（＝同六百マルク）
・自由学芸教師：同二〇マルク×六名を一〇年間（＝同一千二百マルク）
・文法教師：同一〇マルク×二名を一〇年間（＝同二百マルク）

【§14[141]】

レモン七世は赦免後直ちに、贖罪のための償いとして、サラセン人に対する十字架を教皇特使から受け取り、本年八月あるいは来年八月に出征する十字軍に従軍し、五年間戦地に留まる。

【§15[142]】

教会とルイ九世およびルイ八世、モンフォール伯とその郎党に付き従った者達をレモン七世は咎めだてせず、彼等が異端者あるいは異端の同調者でない限り、伯は彼らを友人の如く、かつて敵であったことがないかのように厚遇する。教会と国王も同様に、伯に付き従った者達のうち、当該和約に反対する者を除いては、彼等を咎めだてすることはしない。

【§16[143]】

国王はレモン七世の恭順を考慮し、また教会への篤い信仰を持ち続けることを願って、伯が国王に委ねた娘を教会の特免に基づいて、王弟のひとりと娶わせることで伯に恩恵を与えようと望んでいる。さらに、国王は王封となる（レ

ヴィス）元帥領を除く、トゥールーズ司教区全体を伯に残す。

さらに、トゥールーズ伯領の相続に関しては、以下三つの場合が想定される。

① 伯の死後、（自治都市）トゥールーズとトゥールーズ司教区は伯女と結婚した王弟とその子供達のものとなる。

② 王弟が子に恵まれないまま死亡した場合には、（自治都市）トゥールーズとトゥールーズ司教区は国王とその後継者の元に帰し、伯女と伯の他の子供達および相続人は、この件に関して一切権利主張することができない。

③ 伯女が王弟との子に恵まれないまま死亡した場合にも、（自治都市）トゥールーズとトゥールーズ司教区は伯の死後、国王とその後継者の元に帰し、前述の如く王弟と伯女の間の息子か娘でなければ、この件に関していかなる権利主張もできない。

【§17[144]】

国王はアジャンとロデズの司教区をレモン七世に残す。

アルビ司教区については、タルヌ川を挟んでガイヤック側を伯に残すものであり、都市アルビは国王の元に留め置かれ、タルヌ川を挟んでカルカッソンヌ側のアルビ司教区も同様である。

国王と伯は、タルヌ川の真ん中を境として、各自河岸と流水を領するが、他人の権利と財産を侵害してはならない。当地の者達は、王領にあっては国王に、伯領にあっては伯に、それぞれ義務を果たす。

【§18[145]】

国王は、カオール司教区も伯に残すが、都市カオールおよび国王の祖父フィリップ（尊厳）王がその死に際して当該司教区において有していた封土と財産は除外される。

【§19[146]】

レモン七世が、正当な婚姻から生まれた息子に恵まれることなく死亡した場合には、上記の土地は全て王弟と婚姻し

た伯女とその子孫にのみ帰することとなる。

【§20[147]】

レモン七世は以上の諸条件の下に、正当なる領主として、上記で認められた伯領に対し完全なる裁判権と自由な上級領主権 plenum jus et liberum dominium を持ち、その死に際しては、フランス王国の他の諸侯の慣例・慣習に従って、追善のための遺贈を行うことができる。

国王によって伯に認められた以上の事項は、既述の通り教会と聖職者の諸権利を侵害してはならない。

【§21[148]】

レモン七世は、ヴェルフェイユとその属領をラボルドとその属領共々トゥールーズ司教とその息子オリヴィエ・ド・リリエに割譲する。

それらは、かつて現国王の父ルイ（八世）王とモンフォール伯が彼等に与えたものであるが、ヴェルフェイユについては、トゥールーズ司教がモンフォール伯に対して負うところがレモン七世に帰し、オリヴィエが父王ルイに負うところについても、レモン七世に帰するという条件が付く。

また、国王あるいはその父王、またはモンフォール伯によってなされた他の割譲は取り消される。

【§22[149]】

以上、伯が承認した全ての事項について、伯はフランス王国の諸侯の慣例に従い、国王に対して忠臣礼と誠実宣誓 homagium ligium et fidelitatem を行う。

【§23[150]】

ローヌ此岸のフランス王国側にある、レモン七世の所領（所領たり得べきものも含む）に関する諸権利は、国王とその相続人のために、全てはっきりとかつ永久に放棄される。

【§24[151]】

ローヌ彼岸の神聖ローマ帝国側にあるレモン七世の所領（所領たり得べきものも含む）に関する諸権利は、教皇特使

に体現される教会のために、全てはっきりとかつ永久に放棄される。

【§25(152)】

ラングドック住人のうち、教会、国王とその父王、モンフォール伯とその郎党によって当地を追われた者、あるいは自らの意思で後にした者達は、教会による異端宣告を受けていない限り、かつての状況に復され、その財産は返還される。

但し、国王とその父王、あるいはモンフォール伯による割譲が行われた後も所有しえたであろう財産については除外される。

【§26(153)】

レモン七世に残されるべき所領において、教会と国王の命に抗う者達、特にフォワ伯とその一党に対しては、レモン七世は断固として戦争をもって臨み、教会と国王の同意なしに和平・休戦の協定を取り結ぶことはない。

かの者達の所領を占領した際には、国王が教会と自身の安全のため、一〇年間自らそれらを維持することを望まない限り、それらは全て破壊されたうえで、レモン七世が彼等の所領を保持する。また、国王が維持した場合の防禦物・城砦・城壁・濠からの収益は、国王のものとなる

【§27(154)】

教皇特使の意向と命に従い、レモン七世はトゥールーズの市壁を撤去し、濠を埋め立てると共に、以下三〇の都市と城砦の徹底的な破壊と濠の埋め立てを行う。

ファンジョー、カステルノーダリ、ラベセード、アヴィニョネ、ピュイロラン、サン＝ポル＝カプ＝ド＝ジュー、ラヴォール、ラバスタン、ガイヤック、モンテギュー、ピュイセルシ、ヴェルダン、カステルサラザン、モワサック、モントーバン、モンキューク、アジャン、コンドン、サヴェルダン、オートリーヴ、カッスヌイユ、ピュジョル、オヴィラール、ペリュッス、ロラック、その他教皇特使が選ぶ五つ。

これらにつき、伯は国王の同意なく再建してはならず、他の場所に新たに城砦を建造することもできないが、伯が必要と認める場合には、その所領内に要塞化されていない都市を新たに設置することができる。

上記の都市および城砦における伯の封臣が、指示された破壊に応じない場合、伯は断固として戦争をもって臨み、教会と国王の同意なしに、かつそれらの城砦が破壊され、濠が埋め立てられない限り、彼らと和平・休戦の協定を取り結ぶことはない。

【§28(155)】

上記の条項を全て確実かつ永久に遵守することにつき、レモン七世は誠実宣誓を行い、自らの家臣や朋輩にも、同様の宣誓をさせる。

【§29(156)】

レモン七世は、トゥールーズ市民その他、伯に残されるべき所領の住民にも、同様の宣誓をさせるものであるが、彼らの宣誓には、トゥールーズ伯が上記の和約条項を遵守するよう尽力すべきことが付け加えられる。

伯が和約の一部または全部に違反した場合には、当該事実と伯自身の意思をもって、彼らと伯との封建関係は相互に解消され、四〇日間の催告期間を過ぎても、伯が教会あるいは国王に対して果たすべき義務を全うしない場合には、彼らは教会および国王と協力して伯と敵対関係となる。その場合、伯の所領は国王によって没収され、伯は和約以前の状態、即ち破門ならびにラテラノ公会議以降に宣告された決議（＝レモン六世・レモン七世父子の破門およびトゥールーズ伯位の否定）の下に置かれる。

トゥールーズ市民その他、上記の伯に残されるべき所領の住民の宣誓には、かの地において異端者や異端の同調者、支援者、隠匿者その他、異端の事実をもって教会に仇なす者や破門宣告を軽んずる者に対して、教会に協力すべきことが付け加えられ、彼らは、これら全ての者達に対して国王を助け、かの者達が教会と国王の命を受け容れるまでは、断固として戦争をもって臨むこととなる。

これらの宣誓は、五年毎に国王の命によって更新される。

【§30[157]】

以上の全ての条項が果たされるべく、レモン七世は教会と国王の安全を期して、国王にナルボンヌ城館を引き渡し、国王はこれを一〇年間保持し、必要と認める場合には防備を強化する。

同様に、伯は教会と国王の安全を期して国王にカステルノーダリとラヴォールの城塔、およびモンキューク、ペンヌ＝ダルビジョワ、ペンヌ＝ダジュネ、ペリュッス＝ル＝ロックの城砦、さらにはコルド、ヴェルダン、ヴィルミュールの城砦を明け渡し、国王がこれらを一〇年間保持する。

最初の五年間は、これらの維持費として伯がトゥール貨で年間一千五百リーヴルを負担（§11に挙げた銀貨六千マルクとは別）し、残りの五年間については、国王がこれらの保持を継続する場合には、国王が維持費を負担する。

国王あるいは教皇特使の意向によっては、カステルノーダリとラヴォールの城塔、ヴェルダンとヴィルミュールの城砦の四つが破壊されるが、その場合でも、前述の伯の年間負担額であるトゥール貨で年間一千五百リーヴルは減額されない。

これらの城砦からの収益とその領主権に基づいて徴収される一切は伯に帰属し、国王が保持する上記城砦の維持費は、これによって工面される。

伯は教会と国王の双方から嫌疑を抱かれていない人物を徴税官として任命し、かの地における裁判と収益・税の徴収に当たらせる。

【§31[158]】

レモン七世はペンヌ＝ダルビジョワの城砦についても、他の城砦と共に一〇年間の国王の保持に帰すべく、来る八月一日にこれを国王に引き渡す。

当該城砦を期日までに引き渡せない場合、伯はこれを包囲し、攻め落とすまで断固戦争を継続し、城主との和約や休戦には一切応じないが、上記の十字軍遠征には遅滞なく従軍する。

かくして、八月一日から一年以内に伯が当該城砦を国王に引き渡した場合、国王は他の城砦と同じ条件でこれを保持し、他の城砦を伯に返還する際には、同じく返還を受ける。また、一年を経過しても当該城砦を国王に引き渡せない場合には、国王の近臣たる諸権を除き、聖堂騎士団や病院騎士団といった修道騎士団へ永久にこれを寄進する。これらの修道騎士団は、教皇特使やローマ＝カトリック教会の意向に従って、以上の条件の下に当該城砦を保持するが、これを譲渡することも、教会の命令なしに伯のための戦争に役立てることもできない。

なお、当該城砦を保有したいという修道騎士団がない場合には、完全に取り壊され、教会と国王、そして伯自身の同意なしに、これを再建することはできない。

上記のように、国王、聖堂騎士団、病院騎士団、あるいはその他の修道騎士団に、伯が当該城砦を引き渡すまでは、国王はペンヌ＝ダジュネの城砦とナルボネ城館を担保に取る。一〇年以内に当該城砦を聖堂騎士団、病院騎士団、あるいはその他の修道騎士団に引き渡した場合、国王は引き渡しまでにかかった遅延期間分の諸経費を上記の二城から差し引くことができる。また、一〇年以内に当該城砦を引き渡せない場合には、国王は当該城砦の引き渡しまで、引き続き上記の二城を保持する。

【§32[159]】

国王は、トゥールーズ市民および伯に残されるべき所領の住民に対し、彼らがレモン六世およびレモン七世の権力に身を委ねたがために、ルイ九世やルイ八世およびモンフォール伯父子に負っているあらゆる義務を免除し、ルイ九世やルイ八世、トゥールーズ司教をはじめとする高位聖職者、そしてモンフォール伯父子によって科せられる筈であったあらゆる刑罰を赦免する。

彼らは、上記の諸条件を除いては、当該事項に関する宣誓の義務からも解放される。

さらに、これらの項目は内容毎に、①カトリック信仰の護持に関する条項・②所領および相続に関する条項・③封建関係および赦免に関する条項・④軍事条項・⑤財政負担に関する条項、の五つの範疇に分類でき、その内

訳は次のようになる。[160]

①カトリック信仰の護持に関する条項
- §2、§3、§5、§6、§7、§8、§14、§21。

②所領の帰属および相続に関する条項
- （所領の帰属）§16、§17、§18、§23、§24；（相続）§16および§19。

③封建関係および赦免に関する条項
- （封建関係）§1、§4、§20、§21、§22、§26、§28、§29；（赦免）§15、§25、§32。

④軍事条項
- §27、§30、§31。

⑤財政負担に関する条項
- §9、§10、§11、§12、§13。

（三） 和約締結後の経過

さらに『年代記』の記述[161]によれば、パリ和約に関する次の三条項、①カルカッソンヌにおける伯女ジャンヌ（当時九歳）の国王親任官への引き渡し・②五城砦（ナルボンヌ城館、ペンヌ、ペリュッス＝ル＝ロック、コルド、ヴェルダン）の明け渡し・③トゥールーズ市壁五〇〇トワーズの破壊と同じくナルボンヌ城館の濠五〇〇トワーズの埋め立て、の履行を先ず担保すべく、トゥールーズ伯レモン七世が進んでパリのルーヴル監獄に人質として留まったとされるが、パリ和約の締結後は、こうした和約の遵守を保証するための伯による担保の提供や一部履行、王権による履行の強制、和約の遵守に対する返礼が、一二二九年六月までのごく短期間で頻繁に行われている。

そこで以下では、現存する証書史料に基づいて一連の経過を再構成して行くことで、パリ和約の実効性を確保すべく、当事者間でなされたやりとりの模様を辿ってみたい。

1　王権による履行の強制

【一二二九年四月付の開封王状】（AA5/6）[162]

一二二九年四月一二日のパリ和約締結を受けて、王権は十字軍の再開を匂わせる脅迫めいた文書を重ねて提示することで、レモン七世に和約の履行を迫っており[163]、その内容は次の通りである。

・教会と国王の命によりパリにやって来た、故トゥールーズ伯レモンの息子（＝レモン七世）の臣従礼は、和約の諸条項の遵守を条件に受け容れられる。

・和約を違えた場合には、レモン七世自らの意思に基づいて、かの者は臣従礼の受け容れ以前の状態に戻され、臣従礼自体が取り消されるばかりでなく、戦争に加えて、和約においてレモン七世に認められた所領の占領も再開されることとなる。

・今後一〇年の間に、レモン七世が教会に対する義務を怠ってその完遂を拒否して教会に損害を与え、さらに四〇日間の催告期間を徒過した場合には、国王が二ヵ月以内の損害の塡補を伯に強制し、さらに臣従の証として国王の手元に置かれた城塞が、それらから上がる収入と共に教会に引き渡され、当該義務が完遂され、損害が塡補された後に国王へと戻される。

・一〇年後、レモン七世が自らの義務を怠り、その所領が国王の支配下に入った際には、国王は教会がかつて奪われたあらゆる財産と権利を返還する。

【一二二九年四月（一五日～三〇日）付のモンフォール伯アモーリによる証書】[164]

こうした王権の動きに歩調を合わせるように、アルビ十字軍の立役者モンフォール伯シモンの息子アモーリは、以下を内容とする証書を作成している。

・モンフォール伯アモーリは、トゥールーズ伯領とベジエ副伯領およびアルビ一帯の征服地において有する諸権利を、フランス国王ルイ九世とその末代までの相続人に、自ら進んで完全に譲渡する。

・これは、ルイ九世とレモン七世の間で取り結ばれたパリ和約と、その後になされるであろう、国王と当地の他の諸侯との間の和約を受けてのものではない。

・ルイ九世は、この譲渡に対する見返りを考慮する必要はなく、今後その働きに見合った褒賞を与えれば良い。

モンフォール伯父子が、第四回ラテラノ公会議での決定[165]に基づいて、トゥールーズ伯の旧領に有する征服地の全権をフランス国王に移譲することを認める当証書は、パリ和約とは無関係、かつモンフォール伯アモーリの自発的意思に基づくものであることが明記されているが、内容的には、後々想定され得るレモン七世による旧領回復を阻止するための布石としての意味合いが強く、和約の履行を迫る王権の意向を汲んだものと考えられる。

2　伯による履行の保証

続く『年代記』の記述[166]によれば、レモン七世はパリ和約に関する三条項の履行を担保すべく、自ら進んで人質となっているが、これに加えて伯は、モーでの和平会談に引き続きパリに同道していた、伯諮問会議の構成員と目されるトゥールーズ市民を人質として提供していることが、下記の史料から窺われる。

【一二二九年四月付のトゥールーズ伯書状[167]】

パリにおいてレモン七世は、「かくも親愛なる従兄弟であるシャンパーニュ宮中伯ティボーの言に従い per dictum karissimi consanguinei nostri Th. Campanie et Brie comitis palatini」、パリ和約に定めるトゥールーズの市壁とナルボンヌ城館の濠それぞれ五百トワーズ（約一キロメートル）の破壊を保証すべく、フランス国王と教皇特使に、ギー・ド・カヴァイヨン以下二〇名のトゥールーズ市民[168]を人質として差し出し、彼ら人質は解放され次第、即座に現地で上記

作業の指導に従事する旨を宣誓すべきことを宣言している。

【一二二九年四月付の開封王状】（AA5/5）[169]

ルイ九世はこの伯の書状を受けて、パリ和約に関するふたつの条項（①伯女ジャンヌの引き渡し、②五つの城砦：ナルボンヌ城館、ペンヌ、ペリュッス＝ル＝ロック、コルド、ヴェルダンの引き渡し）の履行を担保すべく、レモン七世が「自らの要請と意思に基づいて ad petitionem suam et de propria ipsius voluntate」人質となり、パリのルーヴル監獄に再び収監されるばかりでなく、トゥールーズ市壁五百トワーズの破壊と同じくナルボンヌ城館の濠五百トワーズの埋め立てを確実なものとするため、一〇名のトゥールーズ市民が人質として差し出され、これらの人質はトゥールーズ市壁の破壊とナルボンヌ城館の濠の埋め立ての完了が国王と教皇特使によって確認され次第、解放される旨を宣言している。

ここでは、伯が自ら進んで人質となる代わりに、その他の人質の数が二〇名から一〇名に半減しており、この点につき、「（伯は）自らの意思で、パリにある国王の監獄に留まっていた de voluntate propria remanserat in prisone regis Parisius」という『年代記』の記述からも、当証書における「自らの要請と意思に基づいて」という文句は、単なる定型句ではなく、レモン七世と王権との交渉の痕跡を示すものであると言えよう。[170]

また、「教皇特使が［…］城砦を城砦を破壊すべく当地に派遣した、寛大さを弁えた無数の十字軍士たちは、和平が講じられていなかったならば、武器を携えて遣って来たであろう」という『年代記』の記述[171]からは、程なくして一連の武装解除のための破壊を担当する軍隊が、教皇特使によって派遣されたことがわかる。かくして、ラングドックの人々に対するアルビ十字軍の圧力が維持され、さらに戦争再開への脅威によって、和約の遵守が物心両面で一層促された。

さらに、パリ和約（§26および§28）に基づいて、和約を良しとせず執拗に抵抗を続けるフォワ伯に和約遵守

の宣誓をさせるよう求められたレモン七世は、一二二九年四月二五日付で獄中から以下の書状をフォワ伯に書き送っている。

【一二二九年四月二五日付のフォワ伯宛トゥールーズ伯書状】[172]

当書状においてレモン七世は、「自分はサン＝タンジェロ助祭枢機卿ロマヌス教皇特使およびフランス国王と会談すべく、フランスの地にやって来たが、（和約をめぐっては）以前フォワ伯に見せた、シャンパーニュ伯その他の友人の助言に基づいたもの（＝モー和約）の形式からは、全くかけ離れてしまったex toto recessimus。しかし、フランス国王と教皇特使の意向、そして神の恩寵に従い、望み得る最良の和約を得た」として、無駄な抵抗を続けるよりも、教会と王権との和約に応じた方が良いとフォワ伯の説得を試みている。

このように、レモン七世がいわば調停役として、フォワ伯ロジェ＝ベルナールにローマ＝カトリック教会とフランス王権への恭順を促す書状を書き送っているという事実は、裏を返せば当のレモン七世に、トゥールーズ伯としてのフォワ伯に対する上級領主権が従前通り認められていることを意味しており、南仏諸侯に対するサン＝ジル家系トゥールーズ伯の威光というものが、未だ健在であったことを示すものであると言えよう。

3　和約の遵守に対する返礼

これら所期の諸条項が満たされことをもって、レモン七世は釈放され、「（一二二九年の）聖霊降臨祭（＝六月三日）に、伯は国王によって騎士に叙任された。和約に定められた条項はすぐに遂行され、かの者（＝伯）は祖国に帰還した」という『年代記』の記述[173]によれば、王権はレモン七世を騎士に叙するという破格の恩恵を与えている。というのも、これに先立つ三年前の一二二六年一一月、ランスでの戴冠式に向かう途上のソワソンにおいて、わずか一二歳で慌ただしく騎士に叙せられたルイ九世にとって[174]、それは十全たる騎士王としての姿を顕示す

る好機であったばかりでなく[175]、騎士叙任儀礼の準秘蹟的神話作用と参入儀礼的・戦士的な典礼を通して、国王自身がレモン七世を側近の序列の中に迎え入れることは、先の和約締結に際して伯に加えられた恥辱を埋め合わせるに相応しいものであった[176]。

かくして、騎士として再び王の廷臣の列に迎えられたレモン七世は、一二二九年六月にロリスとモレで開催された国王顧問会議への出席が許され、ロリスにおいては、教皇特使とシャンパーニュ伯を調停役に立て、モー和約（§4）とパリ和約（§18）に基づいて伯に返還されるべき、カオールとサン＝タントナンの領有権[177]をめぐって王権と交渉を行い、以下の成果を上げている。

【一二二九年六月付のトゥールーズ伯証書[178]】

和約によってトゥールーズ伯に返還されるべき、都市サン＝タントナン、都市カオール、その他の封については、伯が和約の履行を担保するために差し出した城砦を維持すべく、今後五年間伯が毎年負担すべきトゥール貨一千五百リーヴルを放棄する代わりに、国王がこれを保持する。

これにより、レモン七世はサン＝タントナンとカオールの領有権こそ認められなかったものの、今後五年間で総額七千五百リーヴルもの負担金（＝和約履行の担保：パリ和約§30）の免除という、王権からの譲歩ないし補償を勝ち取った。さらに、モレにおいては、錯綜したミロー副伯領の領有権問題にも決着を付けている。

そもそもミロー副伯領は、一二〇四年四月にアラゴン王ペドロ二世が、モギオ貨で一五万ソル（＝銀貨三千マルク）の融資の担保として、ジェヴォーダン副伯領と共にトゥールーズ伯レモン六世に領主権を認めたものであるが[179]、その後、ジェヴォーダン副伯領は、ルイ八世によってベロー・ド・メルクールに与えられ、ルイ八世死後

ベローはルイ九世に臣従礼を行っており、他方のミロー副伯領については、パリ和約（§17）によってレモン七世に領有権が認められた、ロデズ司教領の一部となっていた。[180] こうした状況を是正すべく、ルイ九世はルエルグ地方の封建諸侯に通達を出し、レモン七世への臣従礼を命じたのを受けて、レモン七世もミロー副伯領の領有権を証書によって公示しており、その内容は次の通りである。

【一二二九年六月付のルイ九世によるルエルグ諸侯宛通達[181]】

フランス国王ルイ九世は、かつて父王（ルイ八世）に臣従礼を捧げ、忠誠を誓ったロデズ司教区内（ルエルグ地方）の封建諸侯に対し、パリ和約の内容を侵害しない範囲で、それらの義務を免除すると共に、親愛なる従兄弟にして封臣たるトゥールーズ伯レモン七世に臣従礼を捧げ、忠誠を誓うよう命ずる。

【一二二九年六月付のトゥールーズ伯証書[182]】

トゥールーズ伯レモン七世は、以上の通達を受け、ロデズ司教区内のミロー副伯領とその属領が全て国王から返還されたこと、そしてこの返還に異を唱える者に対しては、たとえそれが誰であっても、国王の法廷でその裁定を仰ぐべきことを約す。

このレモン七世の証書は、先のペドロ二世の息子である、アラゴン王ハイメ一世による領有権主張の牽制を第一義とするものであるが、ここでも、トゥールーズ伯レモン七世が廷臣たる大諸侯として王権と渡り合い、確約を引き出している様が看取される。即ち、王権は和約の履行をレモン七世に迫るばかりではなく、誠実に履行された分については返礼をもって報いる、あるいはレモン七世の側でも、自らの義務を果たした分については、和約に定められた王権方の義務の履行を迫るという、互酬性の図式こそが、事態の推移を導く鍵であると言えよう。

そこでは、君臣関係における「友愛」が強調され[183]、騎士として互いの「名誉」を重んじるべく、相互の義務が果たされるのである。

（四）小　括

1　モー和約との比較

かくして、教皇特使ロマヌスの主導によって作成されたと目されるパリ和約は[184]、ヴェセット師やベルペロンに代表される古典的見解[185]とは異なって、相当程度変更が加えられており、レモン七世をして「全くかけ離れたもの ex toto recessimus」と言わしめたことは、先に指摘した通りである[186]。先の『年代記』においては、①自治都市トゥールーズおよびトゥールーズ司教領の領有がレモン七世の一代限りで認められたものの、伯女と王弟の間の子孫以外、その相続権の一切を否定されたこと（§16および§19）・②贖罪として五年間十字軍遠征に参加すること（§14）・③銀貨二万七千マルクの支払い（§9～§13および§30）・④トゥールーズ司教領を除く、東部のプロヴァン侯領に至る全ての所領が国王と教会の手に落ちたこと（§16～§18、§21、§23および§24）、の四点が、パリ和約に顕著な条項として挙げられているが[187]、就中ロクベールの分析に言う「所領の帰属および相続に関する条項」（①・④）および「財政負担に関する条項」（③）は、モー和約との差異を際立たせるものであると言えよう。

(1)　所領の帰属および相続に関する条項

このような観点からパリ和約を見直すと、その冒頭から顕著な差異が見られる。モー和約においては、サン＝ジル家の慣わし通り「ナルボンヌ公・トゥールーズ伯・プロヴァンス侯」からなる三称号[188]を冠せられていたレモン七世は、パリ和約では「トゥールーズ伯」の称号のみとなっており[189]、もはやナルボンヌ公領とプロヴァンス

侯領を有していないことが明示されている。[190] ベルペロンによれば、ナルボンヌ公の称号はそもそも実態の伴わない名目上のものであったに過ぎず、その称号の喪失はレモン七世にとってさほどの重要性はなかったが、東部のプロヴァンス侯領を失ったことは、大きな痛手であった。[191] それは、単にプロヴァンスからラングドックにまたがる一大国家 État provençe-languedocien なる夢の瓦解にとどまらず、ローヌ下流域の都市と港を失ったことによる深刻な経済的打撃をもたらすものであり、[192] かくてパリ和約以降のレモン七世は、この東部旧領の回復を画策することとなる。[193]

これに続く所領に関する条項（§16～§18、§23および§24）は、基本的にモー和約に含まれている事項に留まり、レモン七世には往時の約半分の所領（レヴィス元帥領を除くトゥールーズ司教区・アジャン司教区・司教都市カオールとフィリップ尊厳王の旧領を除くカオール司教区・ロデズ司教区・アルビ司教区のタルヌ右岸）が認められているが、王領に併合され、後の *partes Albienses*（ボーケール＝ニーム総代官区およびカルカッソンヌ＝ベジエ総代官区）を構成する各副伯領は、従前より伯の封臣たるトランカヴェル家の所領となっており、[194] レモン七世が喪失した所領は、実質上往時の半分に満たないと言える。この点、「一二二九年のパリ和約によって、ルイ九世はラングドックの直轄領・間接領の三分の二以上を王領に併合した」として、レモン七世の屈服を強調するヴェセット師に代表される古典的見解[195]は、大きく相対化されよう。

かくして、トゥールーズ伯位を回復し、何とか所領の半分を確保したレモン七世であったが、パリ和約の相続条項（§16および§19）により、サン＝ジル家系存続の期待は完全に打ち砕かれた。先のモー和約（§1）によれば、伯女ジャンヌが子に恵まれないままレモン七世よりも先に死亡し、さらにレモン七世に正当な婚姻から生まれた息子や娘がいる場合に限り、サン＝ジル家系にトゥールーズ伯位と所領をつなぐ望みが残されていたが、パリ和約においては、想定され得るいずれの場合にも、トゥールーズ伯領の継承からレモン七世の子孫は排除さ

れ、伯女ジャンヌを介してトゥールーズ伯領がカペー王家に帰するよう、周到に画策されている。そもそも、トゥールーズ伯サン＝ジル家においても相続慣習法であったと目されるサリカ法によれば[196]、長男による単独相続が原則であるが、モー和約およびパリ和約において初めて女子がトゥールーズ伯領を相続し、これを子孫に伝えることができるとして例外が認められ、この限りにおいて伯女ジャンヌの婚姻は、ルイ九世からレモン七世への「恩恵 gratia」であるとされる。即ち、王弟の義父となるべきレモン七世に旧領の用益権を残すという口実の下に、古来の相続慣習法が王権の意向に沿う形に改変されており、国王が恩恵としてサリカ法の例外を認めることにより、将来トゥールーズ伯領を確実にカペー王家の手中に収めるための布石であった。この点をもってベルペロンは、パリ和約が締結された一二二九年四月一二日こそ、カペー朝王権によるフランス統一の画期であるとする[197]。

しかしながら、こうしたパリ和約の相続条項は、裏を返せば、相続に関する旧慣に従っていつでもこれを覆せる、との認識をレモン七世に抱かせ得るものであり、実際レモン七世は、自身の矜持を保つためにトゥールーズ伯領が委譲されたというだけでは満足せず、これを機に自身のサン＝ジル家系と所領を維持したいと考えていたふしが見受けられる[198]。例えば、レモン七世は一二四一年に妻サンシー・ダラゴンを離縁した後に三度の再婚を画策しているが[199]、これは息子に恵まれれば旧来の慣習法に従ってトゥールーズ伯領が継承され、パリ和約の相続条項など取るに足らないとみなしていたことを端的に示すものであろう。さらに言えば、このような認識があったからこそ、一見苛酷な相続条項に応じたとも考えられるのである。

(2) 財政負担に関する条項

これら所領の帰属および相続に関する条項と並び、パリ和約を特徴付けているのが、総額で銀貨二万七千マルクに及ぶ莫大な財政負担条項であるが、その内訳は以下の通りである。

・教会への損害賠償一万マルク（§9）と罰金四千マルク（§10）。
・城砦の防衛強化費用、総額六千マルク（§11）：但し、これにはモー和約（§12）所定の城砦維持費、五年間で総額七千五百リーヴル（＝三千マルク）の負担分は含まれない（§30）。
・以上、合計二万マルクを四年分割で支払う：年間五千マルクの負担（§12）。
・トゥールーズ大学教員の俸給、総額四千マルク（§13）。

かくして、モー和約所定の城砦維持費以外は、全てパリ和約で付け加えられたものであり、レモン七世には過重な財政負担であったとみなされる。というのも、ベルペロンによれば[200]、トゥールーズ伯領の歳費は、トゥール貨で四万～四万五千リーヴル（＝銀貨八千～九千マルク）であり、既述の通り二ヵ月後には、王権から城砦維持費三千マルクを免除されているものの[201]、未だ二万四千マルクの支払いが残っており、これはトゥールーズ伯領の歳費約三年分に相当するのである[202]。かように苛酷な財政負担の背景には、レモン七世に傭兵や雇われ騎士を召抱える経済的余裕を失わせ、抵抗するための軍事力を奪う意図があるが、さらにフランス王権とローマ＝カトリック教会には、たとえ莫大な金銭負担を課しても、レモン七世はトゥールーズ伯領回復のための取引に必ず応じるとの目算があったと考えられる[203]。反対にレモン七世からしても、いわば買い戻す形で財政負担条項を飲んでいでも、とにかくトゥールーズ伯位と所領を正当なものと認めさせ、自身の矜持を保つことが和約の要であった。したがって、ルイ九世により騎士に叙任され、廷臣の列に加えられるや、和約履行の返礼として、王権からモー和約以来の城砦維持費の免除を取り付けた[204]レモン七世の交渉手腕には、特筆すべきものがあろう。

2　パリ和約における締結儀礼の意義

このように、一見苛酷な内容を片務的に定めた「強いられた和平 patz forsada」であるとして、パリ和約を王

権と教会に対するレモン七世の屈従と捉える古典的見解においては、パリ和約の締結・認証と共に行われた悔悛・赦免の儀礼は、教会を媒介とした北仏カペー朝王権の政治的勝利を示すものであると同時に、以後大諸侯の地位の低下を示すものとして理解される。[205] 現に先の『年代記』には、「かつて王国随一の権勢を誇ったトゥールーズ伯が、破門宣告に悔悛を示す罪人として衣服を剝ぎ取られ、肌着と下穿き姿で、裸足のまま祭壇まで引き立てられるという辱めを受ける様は、憐憫の情を誘うものであった」との記述[206]が見られ、この点オルダンブールは、パリ和約における締結儀礼を外交上の行為であるのと同時に壮大な見世物であったとし、レモン七世は和約を批准しに来た領邦君主ではなく、凱旋式で勝者の乗る戦車の後に続く敗者であり、常に大諸侯が辱められるのを好む大衆は、レモン七世の姿に、フランス国王の不倶戴天の敵が、その裏切りの廉で厳しく罰せられる様を重ね合わせたと見る。[207] そして、このようにレモン七世が純粋な慈悲によって情けをかけられるだけの敗者として儀礼に登場せざるを得なかったとすれば、それはカペー朝王権が神権を自負する程に強大になっていることの証左に他ならないとして、後のルイ一四世へと続く国王崇拝と絶対主義の萌芽を認めている。即ち時のカペー朝王権は、教皇モデルに基づいて、王権の意向に楯突くことは則不敬であるとして行動を起こすことが可能となったのであり、教皇特使ロマヌスが振るった鞭こそ、封建制に対する王権の勝利を象徴するものであった。[208]

しかし、いみじくもヴェセット師が指摘しているように、パリ和約と先に触れた第四回ラテラノ公会議における決定との矛盾に鑑みれば、パリ和約における締結儀礼の意義は、こうした古典的見解に示されるような（特にフランス王権に対する）トゥールーズ伯レモン七世の屈服を印象付けるものとして、単純化することはできない。[209] ヴェセット師によれば、レモン七世が異端者であるならば、第四回ラテラノ公会議での決定に則って、全所領が没収されるべきであり、他方レモン七世が異端者でないならば、教会法上この問題に関して中間的な解決はありえない以上、パリ和約によって所領の約半分を奪われる合理的な理由は見出せない筈である。[210] かくして、パリ和

約の内容からは、レモン七世の正統信仰を確認するよりも、その所領を奪うことで利益を得ようとする、主としてローマ＝カトリック教会の意図が窺われる。そもそも、右公会議の決定においては、レモン七世個人はカタリ派を信仰していなかったとして東部所領（ヴナスク伯領、プロヴァンス侯領の一部、ナルボンヌ公領東部）の領有が保証されており、したがって一二二七年のナルボンヌ公会議における破門[211]は、父祖伝来の所領に対する正当な主張を放棄しなかったためと考えられるが、実際パリ和約においてレモン七世が所領に対する要求を放棄すると、即座に正統信仰が認められ、異端信仰の放棄は一切求められていない。

こうした状況に鑑みれば、ローマ＝カトリック教会がレモン七世から利益を引き出すためには、何としてもレモン七世による自発的悔悛を促し、これに赦免を与えることで自身の要求を正当化する必要があったのであり、この点にこそ、父伯レモン六世がサン＝ジル公会議で行った悔悛・赦免儀礼との決定的な差異が見受けられる。オルダンブールが指摘しているように[212]、一二〇九年にレモン六世がサン＝ジルで鞭打たれた[213]のは、所領で起きた教皇特使の暗殺という大罪の首謀者たる嫌疑をかけられ、領邦君主として自発的にその責任を取ったためであり、第四回ラテラノ公会議の決定も、そうした事情を受けてのものであるが、レモン七世の場合には、正式に罪に問われたわけでも、信仰に問題があったわけでもなく、モンフォール伯父子に刃を向けたにせよ、その要求自体はラテラノ公会議での決定に基づく正当なものであり、たとえレモン七世が屈服しても、トゥールーズ伯位を真っ向から否定することはできない筈であった。あまつさえ、レモン七世は、教会と王権に恭順の意を示し、法外な和平条項の要求に譲歩しているのである。

したがって、ボナシーとプラダリエが言うように「レモン七世にとっての不幸は、王権と教会の双方を相手にしなければならなかったことにある[214]」が、レモン七世は和約の締結・認証に際して、父伯に倣った悔悛・赦免の儀礼を甘受することにより、ローマ＝カトリック教会に対して東部所領に対する正当な領有権を委譲し、莫大な

財政負担を背負ったが、代わりに第四回ラテラノ公会議の決定におけるサン＝ジル家からのトゥールーズ伯位剝奪が取り消され、レモン七世に正当なトゥールーズ伯位が承認された。モンフォール伯アモーリが、右公会議の決定においてその領有を認められ、父伯シモンから受け継いだ征服地トゥールーズ伯領をルイ九世に譲渡した[215]のは、こうした流れを受けたものと目され、これにより王権は、パリ和約という新たな封建契約によってレモン七世に授封し、廷臣の列に再び迎えることで、トゥールーズ伯位ならびに所領を安堵したのである。このように、パリ和約に伴う悔悛・赦免の儀礼は、レモン七世にとって特に教会との関係における駆け引きの結果であり、そこには「内心はどうあれ、外形的行為によって関係性を確認・再構築する」という、中世特有の儀礼による紛争処理の過程を看取することができる。「名誉回復」と「実質的利害」が天秤にかけられ、後の復権の足掛かりとなる「名誉回復」が、悔悛・赦免儀礼による屈辱と過重な財政負担を贖って余りあるものと踏んだからこそ、レモン七世は教会の求めに応じたのであり、さらに贈与の互酬性によって規定されたフランス中世封建社会においては、かような譲歩に対しては相応の返礼をも期待し得るものであった。かくて一二三四年九月には、パリ和約（§24）により教会領となっていた東部所領を教皇グレゴリウス九世より返還されたレモン七世が[216]、「プロヴァンス侯 marchionatus Provincie」として神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世に臣従礼を捧げ、旧領を回復している[217]。

3　同時代人の評価

これら一連の経緯によって成立したパリ和約は、『年代記』の記述によれば、ラテン語から俗語に翻訳されて人々に広く知れ渡っていたとされ[218]、その内容につき大反響を呼んだものと推測される。そして当の『年代記』の著者自身は、パリ和約を次のように評している。

「先の和約においては、数多くの条件が引き出され、あるいは合意を見たが、そのうちのどれかひとつだけでも、国

王が戦場において敵対する伯を見出し、これを捕虜にしたならば、その身代金として充分なものであった。[…] かの者（レモン七世）が自らに課している負担に関する他の条項については、（ここでは）いちいち語らない。かの者が捕虜となっていたならば、何度も身代金を支払ったことになろう。以上は、人間の所業ではなく、確かに神の御業であるということを信じさせるためであった。」[219]

このように、『年代記』においては、パリ和約における過重な片務的負担が批判されているものの、最終的には教会人たる著者自身が、神の思し召しとして若干非難の度合いを緩めている。しかし、同時代の世評のより直接的な代弁者と目される吟遊詩人 troubadour 達は、パリ和約に対してさらに辛辣な批判を加えており、主なものは以下の通りである。

【トミエとプレジー】[220]

第四回ラテラノ公会議での決定を念頭に、トゥールーズ伯が死よりも苛酷な目に合わされている恥知らずな和約よりも、戦争の方がましであると非難する。

【ベルナール・ド・ラ＝バルト】[221]

パリ和約は、ナルボンヌ公・プロヴァンス侯・トゥールーズ伯たるレモン七世のものではなく、聖職者と北仏王権のものであり、善良・安心・確実で友愛に基づくものであり、誠実公正な人間によって取り結ばれたのであれば守りもしようが、それは善よりも悪が勝ったものである以上、気に入らないとしている。

【ギレモ・モンタナゴル】[222]

レモン七世は、聖職者達が彼にした仕打ちとその後の攻防によって思い出されると悼む。

【ギレム・フィゲラ[223]】

救いようもなく堕落したローマ教会は、虚偽と背信に満ちており、そのおぞましい無法さ demesura にレモン七世は打ち負かされたとする。

吟遊詩人達によるこうした批判は、主として教会に向けられたものであり、教会が第四回ラテラノ公会議での決定と矛盾する条項を迫ったばかりでなく、異端撲滅の要求（§2および§3）により、レモン七世に対して「多くの封臣・臣民のみならず、自身の親族や友人達の死刑執行として振る舞うべきことの決断を迫った[224]」ことに起因すると見られる。かくして、同時代人の目には、教会が王権を笠に着て過大な要求を突き付けていると映じる一方、先に挙げた叙情詩の文言からは、和約においては、「慈悲 merci」・「友愛 amitié」・「名誉 honneur」・「忠誠 loyauté」といった、中世封建社会における紛争処理に特有の観念が重視され[225]、それらは当事者間の互酬性によって量られていたことが窺われよう。

五　総　括

以上、モー和約からパリ和約に至る経緯を辿りつつ、これを「紛争処理」に跡付ける作業を行って来たが、古典的見解におけるフランス王権とローマ＝カトリック教会に対するトゥールーズ伯の屈服という単純な構図が、もはや妥当しないことは明らかであろう。従来、モー和約はパリ和約の単なる予備条項とみなされ、レモン七世をして、より苛酷な内容のパリ和約の締結に追い込むための囮であるかのように理解されて来たが[226]、いま一度

「紛争処理」の枠組みに立って振り返るならば、紛争当事者が互いに調停人を立てた上で周到な交渉を重ね、双方が所期の目的を果たすべく、時に大胆な譲歩を行うことで、互酬性に基づく新たな関係性の構築に尽力し、儀礼によりそれを可視化している様子が窺える。

レモン七世にとっては、父伯レモン六世と自身の破門を解いて正式にトゥールーズ伯として復権し、その地位と所領を自らの血統につないで行くことこそが宿願であ[227]り、他方のカペー朝王権にとっては、先王ルイ八世の死を契機とする大諸侯による反乱をひとまず抑えたものの、未だ予断を許さない政情下で、遠隔地ラングドックにおける軍事行動を早期終了に導くことが急務であった。[228] かくして、「友愛による講和」という共通の利益に、旧領回復や南仏の併合といったトゥールーズ伯とフランス王権に固有の利得が入り込み、さらに異端撲滅という、アルビ十字軍当初の大義にまつわるローマ＝カトリック教会の思惑が複雑に絡み付く。そうした状況を踏まえた上で、一連の経緯を具に辿るならば、レモン七世は和約の条項を履行しつつ、着実に復権・旧領回復の段階を進んでおり、決して一方的に和平条項を押し付けられたのではないことがわかる。ル＝ゴフが指摘しているように、[229] 贈与と返礼という互酬性によって支配され、情動的な封建諸侯が織りなす複雑な関係の下で、忠臣が逆臣に、逆臣が忠臣へと容易に転化する当時の社会にあって、和約は常に流動的かつ交渉可能であり、状況の変化に応じて和平の条件を確認・更新する必要があったことは言うまでもない。レモン七世にしても、自らが取り結んだ和約の強制力については、これを楽観視する要素が幾つもあり、[230] 例えば、①伯女ジャンヌはまだ幼く、レモン七世が他の子供に恵まれる可能性もある・②女手に握られた王権は、大諸侯が相手では脆弱である・③隣国アキテーヌを領有する従兄弟のイングランド王[231]と、義父アラゴン王の存在・④神聖ローマ皇帝が、この件に関してどちらにつくか態度を決めていない、[232] といった点が挙げられる。反面このことは、ヴァンドーム条約により、ようやく体裁を整えたばかりのカペー朝王権にしてみれば、幼王ルイ九世がやっと一人前の騎士王として再び廷臣に迎え入

れた南仏屈指の大諸侯トゥールーズ伯レモン七世が、和平条項を履行する度に返礼をもって報い、これを味方に引き入れることで、和平を維持する必要があったことを示唆すると言えよう。[233]

このようにパリ和約は、後のカペー朝王権による南仏併合の布石となったことは確かであるが、[234]それはあくまで結果としての評価に過ぎず、締結の段階でそこまで積極的な意向が働いていたとは考えにくい。むしろ王権と伯は友愛の名の下に互いの名誉に配慮し、それぞれが何らかの利を得るべく周到に根回しをしているという限りにおいて、暫定的・綱渡り的な和平であり、さらに、そこに教会の思惑が加わることによって、一層複雑な利害関係の調整がなされている。したがって、パリ和約を王権伸長の証とみなし、封建制に対する勝利の先駆けと見る古典的見解は皮相的であり、相対化せざるを得ないと言えよう。オルダンブールに至っては、先に述べたように古典的見解をさらに推し進め、パリ和約とその締結儀礼をして大逆罪の適用であり、カペー朝王権による神権ないし絶対権の自負の顕れとの積極的評価を与えているが、[235]ヴァンドーム条約以降、大諸侯との危うい均衡の保持に腐心するカペー朝王権下のフランスは、法人類学に言う、まさに「統治者を欠いた」・「国家の無い」社会であったことに鑑みれば、大逆罪によって大諸侯トゥールーズ伯を一方的に処断するという認識が王権の側にあったとは考えられない。むしろ「紛争処理」の枠組みからは、中世の封建社会特有の「話し合い」（仲裁・和解）の流れに沿って、王権・教会・伯の三者が交渉を重ね、互酬性に根差した譲歩と然るべき返礼により、和平が形成・維持されていたことが窺われ、そこでは勝者と敗者が明らかにされず、レモン七世は王権・教会と対等の立場で交渉の席に着いていることがわかる。さらに、モー＝パリ両和約で繰り返された違約制裁条項（モー和約：§11／パリ和約：§29）が、敗者ではなく対等の当事者たるレモン七世によって、和約がいつでも反故にされ得るという強制力の弱さと共に、交渉の方途が常に残されていることを示唆するものであるならば、先に挙げたフォワ伯宛のトゥールーズ伯書状（一二二九年四月二五日付）[236]における「全くかけ離れたもの ex toto

recessimus」という言葉は、モー和約という囮によってパリ和約に釣り込まれたというレモン七世の慨嘆ではなく、和約そのものにおいて開かれた交渉の道筋を暗示するものと言えよう。

かくして、即位間もないルイ九世の統治下では、伝統的な騎士社会における紛争処理方法が主流であり、統治者の意向あるいは規範に基づいて大諸侯を断罪し、処罰するだけの権威や強制力は、未だ確立されていないことが窺われる。カペー朝王権がその支配基盤を固め、所謂「法の支配」を実現するのは、チェイエットが指摘するように一三世紀半ば以降であ(237)り、さらに南仏ラングドックにこれが徹底されるには、レモン七世の死後、王弟ポワトゥー伯アルフォンスの統治を待たねばならない(238)。

(115) « Deinde profecti sunt Parisius, ut in praesentia regis deberent omnia consummari » : 前掲註(78)参照。

(116) « In nomine sanctae et individuae Trinitatis. Ludovicus, Dei gratia, Francorum Rex. Noverit universi praesentes pariter et futuri, quod, cum Raimundus filius Raimundi quondam Comitis Tolosani, diu in excommunicatione persistens, ecclessiae et Dei volens esse longo tempore contumax et rebellis, ad cor tamen rediens, Domino faciente, ad mandatum ecclesiae et carissimi amici nostri Romani Sancti-Angeli diaconi cardinalis, apostolicae sedis legati, nimium venit humiliter et devote absolutionem suam petens, gratiam et misericordiam ecclesiae et nostram, et non judicium postulando. [...] Actum Parisiis, anno Domini MCCXXVIII, mense aprili, regni vero nostri anno III, astantibus in palatino nostro, quorum nomina supposita sunt et signa » : *Recueil des Historiens des Gaules et de la France*, nouvelle éd., t.19, Paris, 1880, pp.219-223.

(117) « Romanus, miseratione divina Sancti Angeli diaconus cardinalis, Apostolice Sedis legatus, omnibus litteras inspecturis, salutem in Domino. Noverit universi praesentes pariter et futuri, quod, cum nobilis Raimundus, filius Raimundi quondam Comitis Tolosani, diu in excommunicatione persistens, Ecclessiae et Dei et regi Francorum

illustri esset longo tempore contumax et rebellis, ad cor tamen rediens, Domino faciente, ad mandatum Ecclesiae et regis predicti ac nostrum venit humiliter et devote, absolutionem suam petens, gratiam et misericordiam Ecclesiae et regis et non judicium postulando. [...] Actum Parisius, anno Domini M° CC° vicesimo octavo, tertio idus aprilis » : A. Teulet, *Layettes du Trésor des chartes* [*LTC*], t.2, Paris, 1866, n° 1991; *HGL*, t.VIII, cc.893-894.

なお、当該証書の日付は、後掲註(122)に示される通り、本来の和約締結の日付よりも一日前になっていると推定される。

(118) « Raimundus, Dei gratia comes Tholosanus, universis ad quos littere presentes pervenerint, salutem Domino. Noverit universitas vestra, quod cum guerra inter sanctam Romanam ecclesiam et karissimum dominum nostrumn Ludovicum regem Francorum illustrem ex una parte et nos ex altera longo tempore fuisset, nos vera devotione affectantes in unitate sancte Romane ecclesie et fidelitate et servitio domini regis Francie permanere, pacem tem per nos quam per personas interpositas totis viribus procuravimus, que, mediante divina gratia, inter sanctam Romanam ecclesiam et dominum regem Francie ex una parte et nos ex altera est taliter reformata. [...] Datum Parisius, anno ab Incarnatione Domini M° CC° XX° VIII°, pridie idus aprilis » : *HGL*, t.VIII, cc.883-893; *LTC*, t.2, n° 1992.

トゥレの注記によれば、この証書の原本は、フランス国立古文書館所蔵のJ.305.であり、赤と緑の絹紐に緑の封蠟でレモン七世の印璽が押されているが、その謄本と考えられる、同じくフランス国立古文書館所蔵のJ.331.には、日付の直前にサンスとナルボンヌの大司教、パリ・トゥールーズ・アルビ・マグローヌ・ニームの各司教が立ち会った旨の記述（*Rogavimus quoque venerabiles patres Senonensem et Narbonensem archiepiscopos, Parisiensem, Tolosanum, Albiensem, Magalaunensem et Nemausensem episcopos ut presenti carte sua sigilla apponeret. Datum Parisius, etc.*）があり、実際に赤と緑の絹紐に、上記七名それぞれの印璽が緑の封蠟で押されている：*LTC*, t.2, p.152.

(119) ここで、証書の日付について説明しておく必要があろう。レモン七世名義の証書の日付は「一二二八年四月一二日 anno ab Incarnatione Domini M° CC° XX° VIII°, pridie idus aprilis」（前掲註(118)参照）となっているが、これは

中世フランスでは、主として典礼暦を基準とする紀年法が用いられ、以下四つの代表的な方式、即ち①クリスマスを起点とするもの（le style de nativité）・②受胎告知の祝日（三月二五日）を起点とするもの（le style de l'annonciation）・③四月一日を起点とするもの（le style du 1er Avril）・④復活祭を起点とするもの（le style du Pâques）の他、ローマ式暦法も併用されていたためであり、以上を勘案したうえで現在の暦法に換算すると一二二九年四月一二日となる。このことは、モー和約締結をめぐる以下一連の日付の前後関係からも明らかである：*HGL*, t.VII, pp.72-73; W. A. Sibly et M. D. Sibly, *op.cit.*, p.xxxiii.

【モー和約締結に関する伯委任状】（前掲註(77)参照）
「一二二八年一二月一〇日、トゥールーズにて発給 Datum Tholosae, IVo idus decembris, anno dominicae Incarnationis M° CC° XX° VIII°」
【モー和約批准に関する伯書状】（前掲註(79)参照）
「一二二八年一月発布 Actum anno ab Incarnatione Domini M° CC° XX° VIII°, mense januario」（＝一二二九年一月）

(120) « Omnia vero supradicta promisimus et juravimus solemniter ante fores Ecclesiae Parisiensis, domino Romano Dei gratia S. Angeli diacono cardinale Apostolicae Sedis legato praedicto nomine Ecclesiae Romanae, et rege praefacto adstantibus, et venerabilibus patribus domino Ottone S. Nicolai in carcere Tulliano diacono cardinale Apostolicae Sedis legato tunc eunte in Daciam, Senonensi et Narbonensi archiepiscopis, Parisiensi, Aeduensi, Nemausensi, Maglonensi, et Tolosano episcopis. Adscripta est deum dies XII Aprilis hujus anni » (Greg. IX. 1.12, p.81) : Od. Raynaldi, *Annales ecclesiastici*, réimpr. par Mansi, t.20, Lucques, 1852, p.554, n.2; « Omnibus ad calcem ductis et sigillatis, reconciliatus fuit comes in die Paraceves, et qui cum eo erant excommunicationis sententia innodati. Eratque pietas virum tantum videre, qui tanto tempore, tot et tantis nationibus poterat restitisse, duci nudum in camisia et braccis et nudis pedibus ad altare. Erant praesentes ad haec, duo Romanae Ecclesiae

Cardinales, unus Legatus noster in Regno Franciae, et alius in Regno Angliae Episcopus Portuensis » : *Chronique*, ch.XXXVII.

(121) « Romanus, miseratione divina Sancti Angeli diaconus cardinalis, Apostolice sedis legatus, omnibus presentes litteras inspecturis salutem in Domino. Cum nobilis vir Raimundus, filius Raimundi quondam comitis Tholosani, qui diu Ecclesie ac regi Francie illustri extitit contumax et rebellis, ad mandatum Ecclessie, regis predicti et nostri venerit, humiliter et devote absolutionem suam petens, misericordiam et gratiam Ecclesie regisque prefati et non judicium postulando, necnon super omnibus, pro quibus excommunicatus fuerat, in die cene Domini ante fores ecclesie Parisiensis parere precise mandatis Ecclesie atque nostris solemniter juravit coram nobis ; nos attendentes humilitatem et devotionem ipsius, absolutionis beneficium sibi curavimus impendere, juxta formam Ecclesie consuetam, quem statim postmodum de voluntate sua, si contra ea vel eorum aliquod que promisit veniret et non emendaret, sicut in instrumento pacis exinde confecto plenibus continetur, excommunicavimus, reducentes eum ad statum illum in quo fuerat ante absolutionem premissam quoad excommunicationem et omnia alia, que contra ipsum et ptrem suum in generali concilio vel postea statuta fuerunt. In cujus rei testimonium, presentes litteras fecimus fieri et sigillo nostro confirmari. Datum Parisius, II° idus aprilis, anno Domini M° CC° XX° VIII° » : *HGL*, t.VIII, cc.893-894.

(122) この点につき、『年代記』の著者ギョーム・ド・ピュイロランの記憶には混乱が見られる。『年代記』の記述によれば、教皇特使によるレモン七世の赦免は、パリ和約の締結・認証後の聖金曜日（＝復活祭直前の金曜日）に行われたとされる（« Omnibusque ad calcem ductis et sigillatis, reconciliatus fuit comes in die Paraceves » : ch.XXXVII.）が、教皇特使の赦免状の日付（« Datum Parisius, II° idus aprilis anno Domini M° CC° XX° VIIII° » : 前掲註（121）参照）は、パリ和約のもの（« Datum Parisius, anno ab Incarnatione Domini M° CC° XX° VIII°, pridie idus aprilis » : 前掲註（118）参照）と同じになっていることから、レモン七世の赦免は聖金曜日ではなく、聖木曜日（＝復活祭直前の木曜日）であったと考えられる。このことは、『年代記』の別の個所の記述からも補強され得る。『年代記』では、復活祭を起点とする暦法（前掲註（119）参照）が用いられており、一二二九年七月の教皇特使代理ピエール・ド・コル

ミューによる自治都市トゥールーズの赦免について述べた箇所で、パリ和約が前年末に締結されたと記している（« Post pacem autem Parisius calebratam in fine anni, in sequenti anno ab incarnatione Domini M° CC° XXIX mense julii, per magistrum Petrum de Collemedio vices legati fuit reconciliata civitas Tholosa... » : ch.XXXVIII）が、これは一二二九年の復活祭が四月一五日であり、したがって新年の開始がパリ和約締結の三日後であった点と一致する。

(123) « His omnibus rite peractis, descendit legatus ad villam S. Ægidii, reconciliaturus ibi comitem Tolosanum ; modus autem reconciliationis et absolutionis talis fuit. Adductus est comes nudus ante fores ecclesiae B. Ægidii, ibique coram legato, archiepiscopis et episcopis qui ad hoc convenerant plusquam viginti, juravit super corpus Christi, et sanctorum reliquias, quae ante fores ecclesiae expositae cum magna veneratione, et in multa copia a praelatis tenbantur, quod mandatis S. R. Ecclesiae in omnibus obediret. Mox legatus stolam ad collum comitis poni fecit, ipsumque comitem per stolam arripiens, absolutum cum verberibus in ecclesiam introduxit » : Pierre des Veaux-de-Cernay, *Historia Albigensium*, in J.-P. Migne, *Patrologia Latina* [*MPL*], t.CCXIII, Paris, 1833, c.564. 『アルビ十字軍史』の成立経緯および著者の人物誌については、W. A. and M. D. Sibly, *The History of the Albigensian Crusade : Peter of les Veaux-de-Cernay's "Historia Albigensis"*, Suffolk, 1998, pp.xxiii-xxvi. 参照。

(124) « Haec est forma iuramenti facta a Raimundo Comite Tolosano apud sanctum Aegidium, in manu Domini Milonis. In nomine Domini anno Pontificatus Domini Innocentii Papae tertii, duodecimo, 14. Kal. Iulii. Ego Raimundus Dux Narbonensis, Comes Tolose, Marchio Provinciae sacro sanctis reliquiis, Eucharistia et ligno Crucis Dominicae compositis supra sancta Dei Euangelia corpolaliter manu tacta, iuro quod supra singulis et universis capitulis pro quibus a Domino Papa vel eius Legato, vel aliis ipso iure fui vel sum excommunicatus, stabo mandatis in primis Domini Papae ac vestris Magister Milo Domini Papae Notari, Apostlicae sedis Legate, ita videlicet ut quicquid per vel literas suas Nuncius vel Legatus mihi praeceperit, super universis capitulis quibus excommunicatus fui vel sum bona fide, sine fraude ac mala in ingenio adimplebo, super istis praecipue capitulis quae hic nomino... » : G. Catel, *Histoire des comtes de Tolnouse*, Toulouse, 1623, pp.245-246.

(125) サン＝ジル公会議の出席者のうち、レモン六世の赦免に立ち会ったこれらの高位聖職者の顔ぶれについては、教

皇インノケンティウス三世文書における以下の記述（*MPL*, t.CCXVI, c.94.）によって確認することができる：« Istam autem concessionem et promissionem feci apud Sanctum Ægidium anno pontificatus domini Innocentii III duodecimo, XIII Kal. Julii, ad mandatum et exhortationem magistri Milonis domini papae notarii, apostlicae sedis legati, praesentibus domino Michaele Arelatensi archiepiscopo cum episcopis infrascriptis, videlicet Marsiliensi, Avenionensi, Cavellicensi, Carpentoractensi, Vasionensi, Tricastrinensi, Lodovensi, Tolosano, Biterreusi, et domino archiepiscopo Aquensi, et episcopo Forojuliensi, et Niciensi, et Aptensi, et Sistericensi, et archiepiscopo Auxitano, et episcopo Aurasicensi, et Vivariensi, et Uticensi. »

(126) M. Roquebert, *op.cit.*, p.415.

(127) 以下本稿においては、レモン七世名義の証書（前掲註（118）参照）に準拠して考察を行うものとし、項目分けについては、ボナシーとプラダリエに従った：P. Bonnassie et G. Pradalié, *op.cit.*, pp.25-34.

(128) « Promittimus siquidem domino Romano S. Angeli diacono cardinali, Apostolice Sedis legato, nomine ecclesie Romane, quod Ecclesie, et domino nostro Ludovico regi Francorum, et heredibus ejus, de certo devoti erimus et usque ad mortem fideliter adherebimus. »

(129) « et quod hereticos, et eorum credentes, fautores et receptatores, in terra, quam nos et nostri tenemus et tenebimus, semper totis viribus expugnabimus, non parcentes in hoc proximis, vassalis, consanguineis nec amicis, et terram eandem purgabimus ab hereticis et heretica feditate, et juvabimus etiam purgare terram quam dominus rex tenebit. »

(130) « Promittimus etiam quod justiciam debitam sine mora faciemus de hereticis manifestis, et fieri faciemus per ballivos nostros viriliter et potenter ; inquiri faciemus et inquiremus diligenter de inveniendis hereticis, credentibus, fautoribus et receptatoribus eorundem, secundum ordinationem quam super hoc faciet dominus legatus. Et, ut facilius et melius hereticí valeant inveniri, promisimus quod solvemus, usque ad biennium, duas marchas argenti, et exinde in perpetuum unam, ei qui hereticum ceperit, et per episcopum loci, vel alium qui potestatem habeat, ile, qui captus erit, fuerit de heresi condemnatus, ita quod, si plures ceperit, pro singulis

dabimus aut dari faciemus tantumdem. De aliis no manifestis, et credentibus, receptatoribus et fautoribus hereticorum, servabimus et servari faciemus secundum quod dictus legatus vel Romana ecclesia ordinabunt. »

(131) « Item servabimus et servari faciemus pacem in terra quam nos et nostri tenebimus, et juvabimus servari in terra quam dominus res ad manus suas tenebit, et ruptarios expellemus et puniemus animadvesione debita et receptatores ipsorum. »

(132) « Ecclesias et viros ecclesiasticos defendemus et defendendi faciemus a nostris, et jura, libertates et immunitates quas habent conservabimus eiusdem, et faciemus firmiter conservari. Et, ne de cetero in terra illa claves Ecclesie contempnantur, sententias excommunicationis servabimus, et servari a nostris et per nostros faciemus. Excommunicatos vitabimus et vitari faciemus, sicut in sacris constitutionibus continetur. Et, si aliqui per annum in excommunicatione contumaciter permanserit, ex tunc, ad mandatum Ecclesie, ipsos ad sinum matris Ecclesie redire compellemus, occupando omnia bona sua mobilia et immobilia, et tenebimus donec ad plenum satisfaciant de causa pro qua excommunicationis vinculo fuerint innodati, et de dampnis datis occasione excommunicationis predicte. »

(133) « Faciemus omnes ballivos nostros, institutos et instituendos, in ipsa institutione jurare quod omnia supradicta fideliter observabunt ; ita quod, si negligentes in hiis reperiti fuerint, pro modo delicti puniemus ; et, si culpabiles, puniemus omnium amissione bonorum. Instituemus etiam ballivos non judeos sed catholicos in terra, et nullius heresis suspicione notatos. Et tales prohibiti non possint admitti ad ememdum redditus civitatem, villarum, vel castrorum, vel pedagiorum. Et si forte aliquis talis ignoranter institutus fuerit, expellemus eum et puniemus, cum super hoc fuerimus certificati. »

(134) « Item promittimus quod omnia bona inmobilia et jura ecclesiarum et ecclesiasticorum virorum ad presens restituemus et restitui faciemus ad plenum a nostris in terra tota quam nos et nostri tenebimus ; illa videlicet que ecclesie vel ecclesiastice persone tenebant ante primum adventum crucesignatorum, vel de quibus constabit eas spoliatas. De aliis stabimus juri coram ordinariis, vel coram ipso legato, vel ab ipso legatis vel a Sede Apostolica

delegatis. »

(135) « Promittimus etiam quod nos solvemus in posterum integre decimas, et solvi faciemus integre, bona fide, a nostris, et quod milites et alii laici non habeant decimas, nec permittemus ipsos tenere eas in terra quam nos et nostri tenemus et tenebimus ; set ad ecclesias, juxta dispositionem ipsius legati vel ecclesie Romane, integre revertantur. »

(136) « Pro dampnis vero illatis, a nobis et nostris, ecclesiis et viris ecclesiasticis super rebus mobilibus, vel destructione domorum vel villarum, vel aliarum rerum, exceptis immobilibus, de quibus debet fieri restitutio sicut superius dictum est, solvemus decem millia marcarum argenti, assignanda bonis personis, idoneis et fidelibus, quas ipse legatus eliget vel ecclesia Romana ; que quantitatem predictam, de bonorum virorum consilio, proportionaliter et fideliter divident, juxta quantitatem dampnorum. Nec poterimus, nos vel nostri, pro dampnis mobilium vel destructione domorum, vel villarum, vel aliarum rerum, sicut superius est expressum, ultra summam illam amplius conveniri. »

(137) « Item solvemus abbatie Cisterciensi II^{m} marcarum argenti, ut emantur inde redditus pro refectione abbatum et fratrum in capitulo generali ; abbatie Clarevallis D marcas ad emendum redditus pro refectione abbatum et fratrum, qui conveniunt in festo nativitatis beate Virginis ; abbatie Grandissilve M marcas ; abbatie Bellepertice CCC marcas ; abbatie Candelii CC marcas, ad dicta monasteria construenda, tum pro damnis eisdem illatis in rebus mobilibus, tum pro salute anime nostre. »

(138) « Item VI^{m} marcarum solvemus, que retinebuntur ad muniendum, inforciandum et custodiendum Castrum Narbone[ense] et alia castra quedominus rex pro Ecclessie et sua securitate tenebit usque ad decennium, prout inferius continetur, sicut visum fuerit expedire. »

(139) « Supradicta vero XX^{m} marcarum solvemus usque ad quatuor annos, ita quod quolibet anno solventur V^{m} marcarum. »

(140) « Item IV^{m} marcarum deputabuntur a nobis IV magistris theologie, duobus decretistis, VI magistris artium

liberalium et duobus grammaticis regentibus Tholose, que dividentur hoc modo : singuli magistrorum theologie habebunt singulis annis L marcas usque ad decennium ; utque magistrorum decretorum habebit XXX marcas usque ad decennium singulis annis ; singuli magistri artium habebunt XX marcas usque ad decennium similiter annuatim ; uterque magistrorum artis grammatice habebit similiter annuatim X marcas usque ad decennium. »

当該条項をめぐって、トゥールーズ大学の嚆矢とされる。

(141) « Item, statim post absolutionem nostram, assumpsimus pro penitentia nostra crucem de manu dicti legati contra Sarracenos, et ibimus ultra mare ab instanti passagio mensis augusti usque ad aliud passagium mensis augusti proximo futurum, ibidem per quinquennium continuum integre moraturi. »

(142) « Illos autem qui adheserunt Ecclesie, domino regi, patri ejus, comitibus Montisfortis et adherentibus eis, occasione hujusmodi quod adheserunt Ecclesie, domino regi, patri ejus, comitibus Montisfortis et adherentibus eis, non gravabimus ; set benigne tractabimus eos tanquam amicos, ac si nobis contrarii non fuissent, exceptis hereticis et credentibus ipsorum. Et Ecclesia et rex facient similiter illud idem de illis qui nobis contra dominum regem et Ecclesiam adheserunt, exceptis illis qui pacem Ecclesie et domini regis non veniunt nobiscum. »

(143) « Dominus autem rex, attendens humilitatem nostram et sperans quod in devotione Ecclesie et fidelitate ejus fideliter perseveremus, volens nobis facere gratiam, filiam nostram, quam sibi trademus, tradet in uxorem uni de fratribus suis, per dispensationem Ecclesie, et dimittet nobis totum episcopatum Tholosanum, excepta terra marescalli [G. de Levis], quam ipse marescallus tenebit domino rege. Post mortem autem nostram, Tholosa et episcopatus Tholosanus erunt fratris domini regis qui habebit filiam nostram, et filiorum susceptorum ex ipsis duobus. Si autem frater domini regis, quod absit, moreretur sine filiis ex ipsa, Tholosa et episcopatus Tholosanus ad dominum regem revertetur, et heredes suos ; et filia, vel alii filii, vel filie vel heredes nostri nichil juris in ipsis poterunt reclamare. Et si ipsa filia sine filiis ex fratre domini regis moreretur, Tholosa similiter et episcopatus Tholosanus ad adominum regem et heredes ejus revertetur ; ita quod, omni casu contingente, ad dominum regem et heredes ejus Tholosa et episcopatus Tholosanus revertetur post mortem nostram. Et nulli poterunt ibi jus

aliquod reclamare nisi filii vel filie descendentes ex fratre domini regis et filia nostra, sicut est supradictum. »

(144) « Item dimittit nobis dominus rex Agennensem et Ruthinensem episcopatus. De episcopatu Albiensi dimittit nobis quicquid est de episcopatu Albiensi citra fluvium de Thar, videlicet ex parte de Gaillac ; et civitas Albiensis remanebit ex parte domini regis, et quicquid est ultra illud flumen versus Carcassonam in eodem episcopatu Albiensi. Et dominus rex habet rippam et aquam, ex parte sua, usque ad medium fluminis, et nos similiter habemus rippam, ex parte nostra, et aquam usque ad medium fluminis, salvis juribus et hereditatibus aliorum, dummodo de hiis que sunt ex parte domini regis faciant ei quod debebunt, et de his que sunt ex parte nostra, faciant nobis similiter quod debebunt. »

(145) « Episcopatum autem Caturcensem dimittit nobis dominus rex, excepta civitate Caturcensi, et feodis et allis que habuit in eodem episcopatu rex Philippus, avus ejus, tempore mortis sue. »

(146) « Et, sin nos sine filiis de legitimo matrimonio procreatis decesserimus, tota terra predicta remanebit filie nostre quam habebit frater domini regis, et heredibus ex ea susceptis. »

(147) « ita tamen quod nos, ut verus dominus, habeamus plenum jus et liberum dominium in supradicta terra que dimittitur nobis, salvis conditionibus supradictis, tam de civitate Tholose et episcopatu Tholosano, quam de terra alia superius nominata, et in morte pias eleemosinas possimus facere, secundum usus et consuetudines aliorum barobum regni Francie. Supradicta omnia dimittit nobis dominus rex, salvo jure ecclesiarum et ecclesiasticorum virorum, sicut superius est expressum. »

(148) « Viridefolium cum pertinentiis suis, et villam de les Bordes cum pertinentiis suis, dimittimus, secundum donum bone memorie Ludovici regis patris ejusdem domini regis et comitis Montisfortis, episcopo Tholosano et filio O. de Lyliers ; ita quod episcopus Tholosanus pro Viridifolio faciat nobis quod debebat facere comiti Montisfortis, et filius ejusdem O. faciat nobis quod debebat facere bone memorie. Ludovico regi, patri domini regis. Donationes alie a domino rege, vel patre ejus, vel a comitibus Montisfortis facte non teneant, nec nos vel nostri ad eas teneamur, in terra que nobis et nostris dimittitur. »

(149) « De omnibus autem aupradictis, que dimittitur nobis, fecimus domino regi homagium ligium et fidelitatem, secundum consuetudinem baronum regni Francie. »

(150) « Totam aliam terram que est citra Rodanum in regno Francie, et omne jus, si quod nobis competit vel competere posset in ea, quitavimus precise et absolute domino regi et heredibus ejus in perpetuum. »

(151) « Terram autem que in Imperio ultra Rodanum, et omne jus, si quod nobis competit vel competere possit in ea, precise et absolute quitavimus dicto legato, nomine Ecclesie, in perpetuum. »

(152) « Item omnes indigene qui faiditi fuerunt de terra illa pro Ecclesia, pro domino rege, et parte ejus, et comitibus Montisfortis, et adherentibus eis, vel propria voluntate recesserunt ab eadem terra, nisi inveniantur heretici ab Ecclesia condempnati, integre restituantur in statum pristinum quoad hereditates et possessiones, preter illa, si qua ex causa donationis a domino rege, vel parte ejus, vel comitibus Montisfortis habuerunt. »

(153) « Si vero aliqui hominum, qui remanebunt in terra que nobis dimittitur, noluerint redire ad mandatum Ecclesie et domini regis, specialiter comes Fuxensis et alii, nos faciemus eis vivam guerram, nec pacem cum ipsis faciemus vel treugas sine assensu Ecclesie et domini regis ; et si terre ipsorum occupabuntur, remanebunt nobis, destructis tamen prius omnibus munitionibus et forteritiis, muris et fossatis, nisi dominus rex, pro securitate Ecclesie et sua, vellet ea retinere usque ad decennium post acquisitionem ; et tunc, cum reditibus et proventibus ipsorum castrorum, retinebit ipsa. »

(154) « Item nos faciemus dirui muros civitatis Tholose omnino et fossata repleri, juxta mandatum et voluntatem et ordinationem legati. Item diruentur per nos muri funditus, et replebuntur fossata triginta villarum et castrorum : scilicet de Fanojovis, de Castro-novo, de la Becada, de Avynineto, de Podio-Laurentii, de Sancto-Paulo, de Vauro, de Rabasten, de Gallyac, de Monte-acuto, de Podiocelso, de Verduno, de Castro-Sarraceno, de Moysiaco, de Monte-albano, de Montecuco, de Agenno, de Comdumo, de Savarduno, de Altarippa, de Cassenolo, de Pugeolis, de Alto-villari, de Villa-Perucie, de Loracco, et de quinque aliis ad voluntatem ipsius legati ; et non poterunt reedificari, sine voluntate Ecclesie et domini regis ; nec alibi fient nove fortericie ; villas tamen non inforciatas bene poterimus

facere in terra que dimittitur nobis, si voluerimus. Si vero aliquam villarum vel castrorum que debent dirui, ut dictum est, essent hominum nostrorum, et nollent quod diruerentur, nos faciemus eis vivam guerram, nec pacem vel treugas, sine assensu Ecclesie et domini regis, cum eis faciemus, donec diruantur muri et impleantur fossata. »

(155) « Omnia supradicta promisimus et juravimus dicto legato et domino regi nos firmiter et perpetuo servaturos bona fide, sine fraude et malo ingenio, et quod faciemus bona fide ab nominibus et vassalis et fidelibus nostris firmiter observari. »

(156) « Faciemus etiam illud idem jurare omnes cives Tholosanos et alios homines terre que nobis dimittitur ; et addetur in juramento eorum quod ipsi dabunt operam efficacem quod nos servemus ea ; et si venerimus contra predicta ; vel aliquod predictorum, ipso facto, de voluntate nostra sint absoluti et ex nunc nos eos absolvimus a fidelitate et homagio quibus ipsi tenentur nobis, et omni alia obligatione, et adherebunt Ecclesie et domino regi contra nos, nisi, infra XL dies postquam fuerimus ammoniti, hoc emendaverimus vel juri steterimus coram Ecclesia de hiis que ad Ecclesiam pertinent, et juri coram domino rege de hiis que ad ipsum pertinent ; et tota terra ipsa que dimittitur nobis incidet in commissum domini regis, et erimus in eodem statu in quo nunc sumus quoad dominum regem et quoad excommunicationem et omnia alia que statuta fuerunt contra nos et patrem nostrum in Concilio generali, vel postea. Addetur autem in juramento eorum quod ipsi juvabunt Ecclesiam contra hereticos, credentes et fautores eorum, et receptatores, et omnes alios qui Ecclesie contrarii existent occasione heresis vel contemptus excommunicationis in terra que dimittitur nobis et in terris superius nominatis, et dominum regem juvabunt contra omnes, et quod eis facient vivam guerram donec ad mandatum Ecclesie revertantur et domini regis. Renovabuntur autem juramenta predicta de quinquennium, ad mandatum domini regis. »

(157) « Ut autem predicta omnia adimpleantur, et Ecclesie et domino regi plenius et melius observentur, trademus, pro securitate Ecclesie et domini regis, in manibus domini regis castrum Narbonense, quod tenebit usque ad decennium, et muniet et inforciabit, si visum fuerit expedire. Item trademus ei pro securitate Ecclesie et sua, in

manibus suis, caput Castrinovi, caput Castri Vauri, castrum de Monte-Cucco, Pennam de Agenesio, castrum Cordue, Ruppem-Perucie, castrum Verduno, castrum de Villamuro ; et usque ad decennium tenbit ea, ita quod primis V annis solvemus ei pro expensis custodem, quolibet anno, M D libras Turonensium, non computatis in hiis sex milibus marcarum pedictis : in aliis V annis, si voluerit tenere, faciet propriis expensis custodiri. Dominus rex tamen poterit, si placet Ecclesie et sibi, diruere IV castra de predictis, scilicet caput Castrinovi, caput Castri-Vauri, Villamurum et Verdunum ; et propter hoc non diminuetur predicta summa M D librarum Turonensium. Redditus et proventus castrorum, et omnia que jure dominii percipiuntur, erunt nostra ; et ipse ad sumptus suoa tenebit capita ipsorum castrorum et Corduam. Et nos habebimus ibi ballivos nostros, non suspectos Ecclesie et domino regi, qui facient justiciam hominibus, et recipient redditus et proventus predictos. Post decennium autem restituet nobis dominus rex capita castrorum dictorum et Corduam libere, salvis conditionibus supradictis, et si predicta omnia quantum ad Ecclesia et dominum regem fuerint observata. »

(158) « Pennam autem de Albigesio trademus domino regi infra kalendas augusti proximas, cum aliis castris detinendam ab eodem usque ad decennium. Si vero illam habere non poterimus usque ad terminum illum, ex tunc obsideri faciemus, et vivam guerram fieri, tamdiu quousque ipsam habeamus ; nec pacem vel treugam faciemus cum ipso qui tenet et qui tenebit, donec ipsam habeamus. Non tamen propter hoc retardabimur a peregrinatione transmarina, de qua superimus est ordinatum. Et si usque ad annum integrum post dictas kalendas augusti tradiderimus domino regi castrum predictum, scilicet Pennam de Albigesio, erit in conditione predictorum castrorum, scilicet quod reddet illud nobis dominus rex quando reddet alia castra. Si vero post annum predictum ipsam Pennam de Albigesio non poterimus assignare, ex tunc trademus eam in elemosinam perpetuo Templariis vel Hospitalariis vel aliis religiosis, salvis hereditatibus eorum qui se tenent ex parte domini regis, possidendam ad voluntatem legati vel ecclesie Romane tali conditione quod ipsi non alienent ipsam a manu sua, nec de ipsa guerram faciant nobis, nisi de mandato Ecclesie. Et si non potuerint aliqui religiosi inveniri qui velint eam habere, diruatur omnio nec possit reedificari sine voluntate ecclesie Romane et domini regis et nostra. Item donec dictam

Pennam de Albigesio trademus domino regi, vel Templariis, vel Hospitalariis, vel aliis religiosis, sicut dictum est, tenebit dominus rex propter hoc obligatam Pennam de Agenesio et castrum Narbonense. Si etiam infra decennium dederimus Pennam de Albigesio Templariis, vel Hospitalariis, vel aliis religiosis, ut dictum est, tanto tempore, si voluerit dominus rex, post decennium, sumptibus suis tenebit illa duo castra prenominata, quanto tempore distulerimus tradere Pennam de Albigesio. Et si post decennium etiam Penna de Albigesio non esset acquisita, tamdiu post tempus memoratum tenebit dominus rex illa duo castra, quosque ipsa Penna sit restituta et assignata, sicut superius est expressum. »

(159) « Et dominus rex absolvit cives Tholosanos, et alios homines terre que nobis dimittitur, ab omnibus obligationibus factis sibi et patri suo, et comitibus Montisfortis, vel aliis pro eis, et a pena et incursibus quibus sibi et patri suo, vel episcopo Tholosano, vel aliis prelatis, vel comitibus Montisfortis se obligaverant, si unquam in dominium nostrum, vel patris nostri, reverterentur, et a sacramento, quantum ad ipsum pertinet, salvis in omnibus et per omnia conditionibus supradictis. »

(160) 内訳はロクベールのもの（M. Roquebert, *op.cit*, pp.400-407.）を基に、多少の変更を加えた。

(161) « Post pacem autem Parisius celebratam in fine anni, in sequenti anno ab incarnatione Domini M° CC° XXIX° mense iulii [...] comite nondum reversus de Francia, qui de voluntate propria remanserat in prisone regis Parisius, donec muri Tholose corruissent et castra et ville fuissent reddita, prout in pace ordinatum, et esset tradita filia eius Iohanna, VIIII^{b} annos habens, regis nuncii Carcassone » : *Chronique*, ch.XXXVIII.

(162) « Ludovicus Dei gratia Francorum Rex, universis praesentes litteras inspecturis salutem in Dominio. Noverit universitas vestra quod cum Raimundus filius quondam Raimundi comitis Tolosani venit ad mandatum Ecclesiae atque nostrum, nos ipsius homagium sub conditione recepimus : Videlicet si ipse omnia servaret quae instrumento pacis factae inter Ecclesiam, nos et ipsum continentur. Si autem praedictus Raimundus dicta omnia quantum ad nos et Ecclesiam non servaret, vel in aliquo contraveniret, nos ipsum ex tunc de voluntate sua in eo statu reponimus in quo fuit antequam homagium reciperemus ipsiusm et ipso facto ex tunc in eo statu omnimodo erit

quod nos et regnum nostrum in quo tunc fuit, ita quod pro nullo habeatur homagium praestitum, et nos et nostri facere possemus currere contra eum et occupare terram quam per pacem dimisimus ei. Noveritis etiam quod nos castra ipsius quae usque ad decennium tenere debemus, tenebimus per memoratum spatium pro Ecclesiae securitate et nostra : Ita quod si dictus Raimundus conventiones quas habet erga Ecclesiam non servaret et laederet vel damnificaret eandem, infra decem annos quibus castra tenebimus antedicta, si ipse infra quadraginta dies emendare nolverit, et tunc nos infra duos menses emendare faciemus. Quod si praedicta castra omnia, Ecclesia ea habere voluerit, trademus Ecclesiae tenenda, ita quod fructus eorumdem castrorum interim percipiet donec sit satisfactum eidem. Et cum fuerit satisfactum castra nobis restituet esset vel regni Francorum inimicus. Et si forte vellet Ecclesia ipsa castra retinere vel a nobis recipere, nos ipsa tenebimus donec sit ipsi Ecclesiae plenarie satisfacrum. Si vero post decennium contra Ecclessia idem Raimundus de terra illa quae incidet in comissum nostrum cum veniet ad manus nostras, restituemus Ecclesiis possessiones et liberates, et iura rerum immobilium quae terra illa dictus Raimundus Ecclesiis abstulisset, seu etiam ipsa Ecclesia amisisset. Ut autem praemissa omnia rata et inconcussa permaneant, praesentes litteras sigilli nostri munimine fecimus roborari : Actum Parisius annno Domini M° CC° vicesimo octavo, mense aprilis »：AA5/6（cité par G. Catel, *op.cit.*, p.339.）

以下、トゥールーズ市古文書館所蔵の証書の摘示に際しては、E. Roschach, *Inventaire des Archives communales antérieures à 1790*, t.1. Toulouse, 1891. の整理番号に従う。

(163) ロクベールによれば、中世フランスにおけるこの種の文書は、執拗に繰り返されることが多いものの、この開封王状は強迫観念に近いものがあるとして、これをローマ＝カトリック教会とフランス国王が、レモン七世の約定にさほど信頼を置いていないことの表れと見ている：M. Roquebert, *op.cit.*, p.416.

(164) « Amalricus, comes Montifortis et Leycestrie, universis presentes litteras inspecturis salutem in Domino. Noverit universitas vestra, quod nos libere et absolute quitavimus clare memorie domino nostro Ludovico, regi Francie illustri, et heredibus ejus in perpetuum, quidquid nobis juris competebat vel competere poterat in comitatu Tholosano, vicecomitatu Bitterrensi et in tota conquesta de Albigesio, promittentes quod in rebus

supradictis nichil juris nos nec heredes nostri de cetero poterimus reclamare, nec etiam pro pace, quam dominus noster Ludovicus rex Francie illustris, filius quondam supradicti domini nostri regis, fecit cum Raimundo comite Tholosano vel facturus sit in posterum cum aliis de terra. Nec ipse dominus rex nobis propter hec tenetur in aliquo, nisi ipse, predictam quitationem et fidele servicium nostrum respiciens, de gratia et liberalitate nobis velit aliquid elargiri. In cujus rei memoriam et testimonium, presentes litteras sigilli nostri munimine fecimus roborari. Actum anno Domini M° CC° XX° IX°, mense aprilis »: *HGL*, t.VIII, cc.894-895.

(165) 一二二五年一二月一四日付の教皇書簡（*HGL*, t.VIII, cc.681-682.）では、公会議の決定として、①前トゥールーズ伯レモン六世は、長らくカトリック信仰の下に所領を統治できなかったことが確証されており、分不相応である所領の統治権の行使から永久に遠ざけられ、その罪を償うに相応しい所領外の土地をあてがわれ、教会に大人しく従う限り、歳費として銀貨四百マルクが与えられるべきこと・②アルビ十字軍の征服地は、最も異端に毒された都市モントーバンとトゥールーズ共々、モンフォール伯シモンに与えられる（但し、カトリック信者と教会の諸権利は除く）・③残りの土地については、前トゥールーズ伯の一人息子がその土地の全部または一部を統治するに相応しく成年に達するまで、教会によって任命された平和と信仰を守るに相応しい人物に委ねられる（その結果、ヴナスク伯領、プロヴァンス侯領の一部、ナルボンヌ公領東部が、レモン七世に残される）べきこと、が確認されている：« Innocentius episcopus servus servorum Dei, universis Christi fidelibus ad quos litere iste pervenerint salutem et apostolicam benedictionem. [...] ut Raimundus quondam Tholosanus comes qui culpabilis repertus est in utroque, nec unquam sub ejus regimine terra posset in pacis et fidei statu servari, sicut a longo tempore certis indiciis est compertum, ab ejus dominio quod utique prave ejessit perpetuo sit exclusus, extra terram ipsam in loco ydoneo moraturus ubi dignam agat penitenciam de peccatis. Verumtamen de proventibus terre pro substentatione sua quadringentas marchas percipiat annuatim, quamdiu curaverit humiliter obedire. [...] Tota vero terra quam obtinuerunt crucesignati adversus hereticos, credentes, fautores et receptatores eorum cum Montealbano et Tholosa, que magis extitit hereticа labe corrupta, dimitatur et concedatur, salvo per omnia catholicorum jure virorum, mulierum et ecclesiarum, Simoni comiti Montisfortis, viro strenuo et catholico, qui plus ceteris in hoc

negotio laboravit, ut eam teneat ab iis quibus est de jure tenenda. Residua terra, que non fuit a curcesignatis obtenta, custodiatur ad mandatum Ecclessie per viros idoneos, qui negotium pacis et fidei manuteneant et deffendant ut provideri possit unico adholescenti filio prefati comitis Tholosani, postquam ad legitimam eatem pervenerit, si talem se studuerit exhibere. Quod toto vel in parte ipsi merito debeat provideri, prout magis videbitur expedire. [...] Datum Laterani X° VIII° kalendas januarii, pontificatus nostri anno X° VIIII°. »

なお、第四回ラテラノ公会議における決定をめぐる経緯の詳細については、稿を改めて論じることとしたい。

(166) 前掲註(161)参照。

(167) « Raimundus, Dei gratia comes Tholose, universis ad quos presentes pervenerint, salutem. Notum facimus, quod per dictum karissimi consanguinei nostri Th., Campanie et Brie comitis palatini, in quem compromisimus, viginti cives Tholose de voluntate nostra et ipsorum in hostagiis karissimi domini nostri Ludovici, regis Francorum illustris, remanebunt quosque quingente tesie rapinales murorum Tholose sint dirute, et totidem tesie fossatorum sint implete, in qua parte Tholose dominus rex et dominus legatus voluerint. Et cum hoc dicto domino regi constiterit, eos debet a suis ostagiis liberare et facere conduci in terram suam. Quorum civium nomina supponuntur : Guido de Cavelleone miles, Raimundus de Castronovo, Bertrandus de Montibus, Hugo de Roais, Ugolinus de Ponte, Ernaudus d'Ecalquens, Pontius Ortolanus, Ernaudus Barravus, Raimundus Ysarnus, Bernardus de Miremont, Raimundus de Ponte, Yspanus Guarinus, Bertrandus de Garrigues, Petrus de Cociano, Petrus de Montibus, Bernardus de Villanova, Petrus de Tholosa, Moranz, Raimundus filius senescalli Ugolinus de Alfario, filius Ugonis Johannis. Juraverunt autem prenominati cives, quod quam cito ab ostagiis predictis liberati recesserint, conventiones de diruendis omnio muris Tholose et implendis fossatis, sicut inter sepedictos dominum nostrum regem et dominum legatum et nos convenit, bona fide et efficaciter persequentur. Actum Parisius, annno Domini M° CC° vicesimo octavo, mense aprilis » : *HGL*, t.VIII, cc.892-893.（下線部著者）

(168) 先に挙げたマンディの分析によれば、これら「和平派貴族」たる権門（カステルノー家、ド・モンス家、ルエ家、デュ＝ポン家、デカルカン家、バロー家、ド・クッサ家、モラン家、ヴィルヌーヴ家、等）が、レモン七世の諮問会

議の大勢を占めていたとされる：前掲註（100）参照。

(169) « Ludovicus Dei gratia Francorum rex, universis ad quos praesentes literae pervenerint salutem. Noverit universitas vestra quod Raimundus filius quodam Raimundi comitis Tolosani remansit in prisione Parisiis apud Luparam ad petitionem suam et de propria ipsius voluntate pro pleniori Ecclesiae securitate et nostra, donec idem Raimundus filiam suam in potestate nostra apud Carcassonam Nunciis nostris tradiderit, et quinque Castra videlicet Castrum Narbonense, Penam in Agenensi, Rupem Parvae, Cordam et Verdum nostris similiter Nunciis assignaverit, ita quod cum filiam suam et dicta Castra sicut praemissum est tradiderit et de hoc nobis et Romano sancti Angeli Diacono, cardinali, Apostlicae sedis legato constiterit, idem Raimundus libere revertetur, et cum eo revertentur Claudius de Cavaillone, Raimundus de Castronovo, Bertrandus Descalquens, Pontius Ortolanus, A. Barraux, Raimundus Ysarnus, B. de Villa-nova, Petrus de Tolosa, Mauran R..., filius Aegidii Hugonis de Alfario et filius Hugonis Ioannis, qui ad maiorem securitatem Ecclessiae et nostra remanserant obsides cum eodem penes nos, in ostagio remanebunt donec nobis et eidem legato constiterit quod de muris Tolosanis dirutum sit usque ad quingentas taysias raptales in parte illae videlicet quae circuit Castrum Narbonnense. Ita quod ad ipsum Castrum liber parteat accessus et repleta sint idem ad plenum fossata. Quod cum factum fuerit et de hoc nobis dicto legato constiterit, iidem obsides libere revertantur. In cuius rei testimonium sigillum nostrum praesentibus literis duximus apponedum. Actum Parisius annno Domini M° CC° vicesimo octavo, menso aprilis » : AA5/5（cité par Catel, *op.cit.*, p.338.）

(170) この点につき、ロクベールは、収監が伯の意思に基づくものである以上、身体的拘束はなく身分に相応しい扱いを受けたと考えられるものの、その後約一ヵ月半に及んだ人質生活が精神的苦痛を伴うものであることは容易に想像でき、したがって伯による人質の申し出は、ローマ＝カトリック教会とフランス王権の苛酷な要求に抗える状況になかったという点に尽きる、としている：M. Roquebert, *op.cit.*, p.417.

(171) « legatus [...] premissis ad terras pro diruendis castris crucesignatis cum indulgentia infinitis, qui venturi erant cum armis nisi pax intervenisset » : *Chronique*, ch.XXXVIII.

(172) « Raimundus, Dei gratia comes Tolose, nobili viro Rogerio Bernardi comiti Fuxensi, sic transire per bona temporalia ut non amittat eterna. Noveritis quod cum venissemus in Franciam ad colloquium venerabilis ac dilecti patris nostri R., Dei gratia Sancti Angeli diaconi cardinalis, Apostolice sedis legati, et karissimi domini nostri illustris regis Francie, a forma tractatus pacis, quam vobis ostendimus, de consilio comitis Campanie et aliorum amicorum nostrorum ex toto recessimus, ponentes nos in voluntate domini regis et domini cardinalis, et certe, mediante divina gratia, meliorem pacem habuimus, quam aliter haberemus. [...] Datum Parisius, in festo sancti Marchi evangeliste »：*HGL*, t.VIII, cc.903-904.

但し、後に触れるように、ここでの「全くかけ離れてしまった ex toto recessimus」という表現は意味深長であり、注意が必要である：M. Roquebert, *op.cit.*, pp.386-387.

(173) « Factus ergo miles idem comes a domino rege in festo Penthecostes, mox impletis que pcta fuerant, ad propria est reversus »：*Chronique*, ch.XXXVIII.

(174) 同時代人であるギョーム・ダンドル師の年代記の記述によれば、「前述のルイの息子であり、未だ一二歳のルイは、ランス司教が空位であるため、ソワソン司教ジャックによってランスで王として聖別される前に、ソワソンで騎士に叙された Ludovicus adhuc duodenis dicti Ludovici filius Suessonis promotus in Militem, Remis a domino Jacobo Suessionum Episcopo quia sedes Remensis vacabat, in Regem solemniter consecratur」とされる：Dom L. d'Achery, *Spicilegium sive collectio veterum aliquot scriptorum*, 2e éd., t.2, Paris, 1723, p.866. シヴェリーによれば、ソワソン伯ラウル・ド・ネールによって、この騎士叙任式が執り行われたとされる：G. Sivéry, *op.cit.*, p.31.

(175) 中世フランスにおいては、王は何よりもまず騎士王でなければならず、かつ騎士への叙任は騎士としての資質を伴った、一人前の男とみなし得る年齢に達してから行われるのが常であった。この点に鑑みれば、未だ子供の王たるルイ九世は、騎士王としての正当性を問われ得る立場にあり、封建慣習法に則ってフランス国王自らがレモン七世を騎士に叙することは、ヴァンドーム条約後も王権に反感を抱く大諸侯を抑える意味をも有していたと目される：J. LeGoff, *op.cit.*, pp.96-97 et 108-109. 特に、ルイ九世の騎士叙任が持つ重要性については、J. Richard, L'adoublement de Saint Louis, *Journal des Savants*, 1988, pp.207-217 を参照。

(176) M. Roquebert, *op.cit.*, p.424.

(177) モー和約（§4）においてレモン七世への返還が定められたサン＝タントナンについて、パリ和約には一切規定がなく、当時王権の実効支配下にあったと目される：M. Roquebert, *op.cit.*, p.392.

(178) « Raimundus, Dei gratia comes Tholosanus, omnibus ad quos presentes littere pervenerit salutem. Noverit universitas vestra, quod cum in venerabilem patrem nostrum Romanum, Sancti Angeli diaconum cardinalem, Apostolice sedis legatum, et nobilem virum Th. comitem Campanie karissimus dominus noster Ludovicus rex Francie illustris et nos compromiserimus, de excambio pro Sancto Antonio nobis faciendo, et pro eo quod in civitate Caturcesi et feodis aliis, que bone memorie rex Philippus habebat in Caturcensio tempore mortis sue, que omnia eidem domino regi remanent per pacem inter ipsum et nos factam, que tamen nos reclamabamus, tandem idem dominus legatus et comes Campanie dictum suum protulerunt in hunc modum : videlicet quod de M et D libris Turonensium, quas per compositionem inter ipsum dominum regem et nos factam eidem domino regi singulis annis debebamus per quinquennium persolvere propter custodiam castrorum, que pro securitate Ecclesie et sua debet si voluerit usque ad decennium custodire, absoluti fuimus penitus et immunes, et predicta domino regi et heredibus suis libere remanent et quiete. Nos autem prolatam dictam prolationem approbantes, presenti pagine sigillum nostrum super hec duximus apponendum. Acta apud Lorriacum, anno domini M° CC° XX° IX°, mense junio » : *HGL*, t.VIII, cc.901-902.

(179) 一二〇四年四月付のアラゴン王の証書（*HGL*, t.VIII, cc.518-522.）によれば、ルエルグのミローでトゥールーズ伯レモン六世と会見したペドロ二世は、都市ミローとシラク、グレーズ、マルヴェジョルその他の城砦、即ちミローおよびジェヴォーダン副伯領（証書では、「ミローおよびジェヴォーダン伯領 comitatu de Amilliauo et de Gavaldano」となっている）における全領主権を担保に、レモン六世からモギオ貨で一五万ソル（＝銀貨三千マルク）の融資を取り付けたとされる：« In nomine Domini nostri Jhesu Christi, anno ejusdem Incarnationis MCCIIII, mense aprili. Nos Dei gratia P [etrus] rex Aragonensis, comes Barcilonie, confitemur et in veritate recognoscimus nos mutuo accepisse a vobis R. Dei gratia duce Narbonensi, comite Tholose, marchione Provincie, CL^{m} solidos

Melgoriensium, de quibus nobis satisfactum solutione et numeratione profitemur, ita quod deinceps exceptionem non numerate peccunie opponere non possimus, imo illi specialiter renunciamus. Quam etiam peccuniam in utilitatem nostram versam esse recognoscimus pro predicta vera quantitate, per nos et successores nostros. Et jure pignoribus, bona fide, sine dolo tradimus cum hac carta vobis predicto R. comiti et successoribus vestris, scilicet burgum quod vulgo vocatur Amilianum, et castrum de Chirac, et castrum de Greze, et castrum de Monnar, [...] cum omnibus pertinentiis eorum et cum omni jurisdictione in militibus et aliis hominibus et feminis. Item quicquid habemus in feudis vel feudalibus vel retrofeudalibus, alodiis, dominicaturis, prediis, vineis, heremis et condirectis, aquis, aquarum decursibus, venationibus, piscationibus, pascuis, molendinis, usaticis, pedaticis, lesdis, furnis, sestaralagiis, firmanciis, justiciis et reditibus notariorum et instrumentorum, et generaliter quicquid habemus vel possidemus, vel aliquis nomine nostro habet vel possidet in toto comitatu de Amiliano et de Gavaldano, sicut nos vel aliquis de genere nostro melius habuit vel possedit... »

（180） M. Roquebert, *op.cit.*, pp.424-425.

（181） « Ludovicus, Dei gratia Francie rex, universis amicis et fidelibus suis in Ruthenensi episcopatu constitutis salutem et dilectionem. Noveritis, quod nos ab homagiis et fidelitatibus de omnibus iis, que habetis in episcopatu Ruthenensi, de quibus videlicet homagia seu fidelitates clare memorie genitori nostro vel nobis prestitistis, vos absolvimus, salvis conditionibus que in carta inter nos et dilectum consanguinem et fidelem nostrum R. comitem Tholosanum, super pace cum Ecclesia et nobiscum confecta, continentur. Unde vobis mandamus, ut de illis homagia et fidelitatem eidem Tholosano comiti faciatis. Actum apud Moretum, anno Domini M° CC° XX° IX°, mense junii » : *HGL*, t.VIII, c.902.

（182） « Raimundus, Dei gratia comes Tholosanus, omnibus presentes litteras inspecturis salutem. Noveritis quod cum karissimus dominus noster Ludovicus, rex Francie illustris, Amilianum et ea que in episcopatu Ruthenensi ad Amilianum pertinent nobis, salvo jure alieno, restituerit, nos eidem domno nostro bona fide promisimus, quod in curia ejus juri stabimus de predictis erga quemlibet conquerentem. In cujus rei testimonium, presenti pagine

sigillum nostrum duximus apponendum. Actum apud Moretum, anno Domini M° CC° XX° IX°, mense junii » : *Ibid.*

(183) ルイ九世とレモン七世は、証書の中で互いを「かくも親愛なる karissimus」と呼び合い、共に友愛を強調している。

(184) E. Lavisse (éd), *op.cit.*, p.9; Z. Oldenbourg, *op.cit.*, p.253.

(185) 「それらの条項（モー和約）は、その後四月にパリで決定されたものと、ほとんど同じである」（*HGL*, t.VI, p.631）：「この合意（モー和約）の本文は、三ヵ月後にパリで恭しく署名されることとなる和約の本文とほとんど同じである」（P. Belperron, *op.cit.*, p.388.）

(186) 前掲註(172)参照。

(187) « ut est quod Tholosam et episcopatum Tholosanum sibi in vita concessum tantum, nulli posset ibi ius reclamare, nisi soli ex ipsa fillia et fratre eiusdem regis tantummodo descendentes. Item sufficeret ad penam eum esse quinquennio ultra mare. Item quod totam aliam terram ultra episcopatum Tholosanum verus orientem infra Rodanum et ultra regi quitavit et Ecclesie, ac dimisit » : *Chronique*, ch.XXVII.

(188) J. Richard, *op.cit.*, p.102.

(189) 前掲註(79)（*Raimundus, Dei gratia Narbonensis dux, comes Tholosae et marchio Provinciae...*）および(118)（*Raimundus, Dei gratia comes Tholosanus...*）参照。

(190) ロクベールはこれを、一二一五年の第四回ラテラノ公会議での決定（前掲註(165)参照）以来、レモン七世にはトゥールーズ伯その他の称号を名乗る資格が無い、という王権と教会の認識の反映であり、トゥールーズ伯の称号に限って回復されたものと見る：M. Roquebert, *op.cit.*, p.400.

(191) P. Belperron, *op.cit.*, pp.391-392.

(192) P. Bonnassie et G. Pradalié, *op.cit.*, p.10.

(193) J. Richard, *op.cit.*, pp.102-103.

(194) *Ibid.*, *loc.cit.*; E. Lavisse (éd.), *op.cit.*, p.8; E. Boutaric, *Saint Louis et Alfonse de Poitiers*, Paris, 1870, pp.64-65.

(195) *HGL*, t.VI, pp.639-640.

(196) M.-B. Brugière, Un précédent à la loi salique? l'exclusion des femmes dans la maison de Toulouse et de Tripoli, in *Mémoires de l'Académie des Sciences, Inscriptions et Belles-Lettres de Toulouse*, 1979, pp.141 et suiv.

(197) P. Belperron, *op.cit.*, p.389.

(198) Z. Oldenbourg, *op.cit.*, p.253; M. Roquebert, *op.cit.*, p.412.

(199) プロヴァンス伯レモン＝ベランジェ五世の三番目の娘サンシー（一二四一年）、ラ＝マルシュ伯女マルグリット（一二四三年）、同プロヴァンス伯の四番目の娘ベアトリス（一二四五年）との婚姻を相次いで画策したが、いずれも失敗している：W. A. Sibly and M. D. Sibly, *op.cit.*, pp.100-101, n.85.

(200) P. Belperron, *op.cit.*, p.393.

(201) 前掲註(178)参照。

(202) ロクベールによれば、銀貨二万四千マルクは純銀五八七二瓩に相当する大金であり（M. Roquebert, *op.cit.*, p.406.）、一二〇四年にレモン六世が、ミローおよびジェヴォーダン副伯領を担保にアラゴン王ペドロ二世に用立てた額の八倍である：前掲註(179)参照。

(203) M. Roquebert, *op.cit.*, pp.407 et 411.

(204) 前掲註(173)・(178)参照。

(205) P. Belperron, *op.cit.*, p.393; Z. Oldenbourg, *op.cit.*, p.257; P. Bonnassie et G. Pradalié, *op.cit.*, p.10.

(206) « Eratque pietas virum tantum videre, qui tanto tempore tot et tantis nationibus poterat restitisse, duci nudum in camisia et braccis et nudis pedibus ad altare » : *Chronique*, ch.XXXVII.

(207) Z. Oldenbourg, *op.cit.*, p.254. この点につきル＝ゴフは、異端ないし異端支援というレモン七世の「不名誉 infamie」が、「（悔悛・赦免という）屈辱的でかつ印象に残る儀式 cérémonie humiliante et impressionnante」によって雪がれたとして、儀礼における互酬性ないし相補性を指摘している：J. Le Goff, *op.cit.*, p.108.

(208) Z. Oldenbourg, *op.cit.*, pp.255 et 257-258.

(209) *HGL*, t.VI, p.638; M. Roquebert, *op.cit.*, p.410.

(210) 前掲註(165)参照。

(211) 前掲註(93)参照。

(212) Z. Oldenbourg, *op. cit.*, p.257.

(213) 前掲註(123)・(124)参照。

(214) P. Bonnassie et G. Pradalié, *op. cit.*, p.12.

(215) 前掲註(164)参照。

(216) ヴェセット師によれば、教皇グレゴリウス九世による東部所領の返還は、レモン七世の要請を受けた摂政母后ブランシュとルイ九世の積極的な働きかけによるとされる：*HGL*, t.VII, pp.90-93.

(217) «In nomine sancte et individue Trinitatis. Fridericus secundus divina favente clementia Romanorum imperator semper augustus, Jerusalem et Sicilie rex. [...] Hac igitur consideratione commoniti, illustris nochilominus viri dilecti, affinis et fidelis nostri, Ramundi comitis Tholosani, fide et devotione pensatis, recepto ab eo pro parte Imperii fidelitatis et homagii juramento, de munificentia gratie nostre, qua bene meritos et devotos nostros benigne consuevimus prevenire, donamus, concedimus et confirmamus sibi et heredibus suis terram Venesini et totam aliam terram, quam in Imperio sive in regno Arelatensi et Viennensi ipse vel antecessores sui habere et tenere consueverunt, videlicet civitates, castra, villas, cum plena jurisdictione, cum omnibus feudis et solitis pedagiis, usaticis et saunariis in ydiomate ipso, que latine saline dicuntur, et cum omnibus aliis justiciis, juribus et pertinentiis ejusdem terre, restituentes eumdem comitem in pristinam dignitatem marchionatus Provincie, quam antecessores sui similiter habuernt, statuenes et imperiali edcito firmiter injungentes, ut nulla omnio persona, alta vel humilis, ecclesiastica el secularis, dictum comitem vel heredes suos de predictis omnibus, sub pena mille librarum auri puri, impedire seu molestare presumat, medietatem cujus camere nostre et aliam medietatem passis injuriam persolvendam decrevimus ad eo vel ab hiis, qui contra hujus nostre majestatis edcitum fuerint ausu temerario presumptores. [...] Acta sunt hec anno dominice Incarnationis M° CC° XXXIV°, mense septembris octave indictionis, imperante domino nostro Friderico, Dei gratia invictissimo Romanorum imperatore semper augusto, [...] Datum apud Montemflasconem, anno, mense et indictione prescriptis »: *HGL*, t.VIII, cc.979-981.

(218) « De forma vero pacis non mea interest scribere, cum vulgata et scripta a pluribus habeatur » : *Chronique*, ch.XXXVII.

(219) « quod de pluribus conditionibus in predicta pace optentis et contentis unaqueque per se sola sufficeret quasi ad redemptionis precium si rex eundem comitem invenisset adversus se in campestri prelio et cepisset [...] Taceoque de ceteris, quorum se supposuit gravitatibus, quibus si captus esset, mulctatus plurium videretur, ut quod factum fuit, factum credatur non per hominem, sed per Deum » : *Ibid.*, *loc.cit.*

(220) **Tomier et Plaisi** — « Tan trop de razos que dire? Que non sai vas cal me vire ; Mas chascus pes e consire Et en Tolosa se mire, Qu'il plus rics a pietz d'aucire. E qui sen avia Mais valria guerreges Que s'avol plag fazia? » : *Histoire Littéraire de la France*, t.XVII, Paris, 1832, p.595.

(221) **Bernard de La Barthe** — « De patz ducs qu'es coms e marques, E patz de clercs e de Frances! Patz sitot s'es bon' e ferma e segura, Patz d'amistat qu'a tot estion gen, Patz qu'a facha pros hom e leialmen, Patz com puesc om ben amar ses rancura, Bona patz mi platz cant dura, E patz forsada no m platz ges ; D'avol patz ven mais mals que bes » : *Ibid.*, p.589.

(222) **Guilhem Montanhagol** — « Sirventes, vay al pro comte dese De Toloza ; membre. lh que fag li an E guart se d'els d'esta ora enan » : Coulet, *Le troubadour Guilhem Montanhagol*, Toulouse, 1898, p.89.

(223) **Guillem Figueira** — « Rome, tant es grans la vostre forfaitura Que Dieu e sos sans engitatz a non-cura ; Tant etz mal renhans, Roma falsa e tafura Per qu'en vos s'escon Ei-s magra ei-s cofon Lo jois d'aquest mon. E faitz gran desmesura Del comte Raimon » : A. Jeanroy, *La poésie lyrique des troubadours*, Toulouse-Paris, 1934, t.I, p.379.

(224) P. Bonnassie et G. Pradalié, *op.cit.*, p.12.

(225) ロクベールによれば、ギレム・フィゲラが用いている *desmesura* の語は、当時の詩歌において「慈悲」・「名誉」・「忠誠」に対置されるものであったとされる：M. Roquebert, *op.cit.*, p.407.

(226) Z. Oldenbourg, *op.cit.*, p.252; M. Roquebert, *op.cit.*, pp.413-414.

(227) M. Roquebert, *op.cit.*, pp.382 et 412.

(228) ヴァンドーム条約からパリ和約までの政情不安については、G. Sivéry, *op.cit.*, pp.377-382. 参照。

(229) J. Le Goff, *op.cit.*, pp.103 et 105.

(230) P. Bonnassie et G. Pradalié, *op.cit.*, p.12.

(231) パリ和約（§22）において、レモン七世は自身に残された全所領について、ルイ九世に忠臣礼を捧げることになっているが、その中には、歴代のイングランド王によって授封されて来たアジャン一帯とケルシー、そしてレモン六世がかつてイングランド王に宗主権を認めたトゥールーズ伯領が含まれていたため、時のイングランド王ヘンリー三世は、こうしたパリ和約を阻止すべく、その締結直前に以下の信任状を携えた使者（聖職者フィリップス・デ・アーデン、ボルドー市民三名）を相次いでレモン七世の元に派遣しているが、奏効していない：Th. Rymer, *Foedera, conventiones, literae, et cujuscunque generis acta publica, inter reges Angliae, et alios quosvis imperatores, reges, pontifices, principes, vel communitates*, 3e éd., t.1-1 et 2, La Haye, 1745, p.106.

【一二二九年三月四日付の信任状】（An.13. H.3. Claus.13. H.3. m.14.d.）

« Rex R. Comiti Tholos. sic transire per bona tempolaria, ne amittat aeterna. Mittimus ad vos, dilectum et familiarem Clericum nostram, Magistrum Philippum de Ardern. In cujus ore quaedam posuimus, vobis plenius referanda, de diminutione gravaminis nostri et tribulationis vestrae. Quibus si fidem duxeritis adhibendam, credimus et speramus in Domino quod ad honorem Dei et sanctae Ecclesiae, necnon et ad vestrum cedent commodum et honorem, pariter et nostrum. Teste Rege apud Mortelak. 4 die Martii. »

【一二二九年三月七日付の信任状】（An.13. H.3. Claus.13. *Ibid.*）

« Rex eidem, sic transire, etc. Mittimus ad vos dilectum et fidelem nostrum Willielmum. Reim. Columb. Civem nostrum Burdegaliae, qui, per aliquantum temporis, moram nobiscum in Anglia nuper fecit, et qui, cum ad vos venerit, plenius vos certificabit. In cujus etiam ore quaedam posuimus vobis exponenda ad honorem Dei, et sanctae Ecclesiae, et commodum vestrum et honorem, pariter et nostrum, quae, propter

viarum pericula, scripto non duximus commendare. Teste Rege apud Farnham, 7 die Martii.»

(232) 時の神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世は、後にレモン七世をプロヴァンス侯として承認している：前掲註(217)参照。

(233) J. Richard, *op.cit.*, p.101.

(234) P. Belperron, *op.cit.*, pp.391 et 394.

(235) 前掲註(208)参照。

(236) 前掲註(172)参照。

(237) この点につき、フランスの法史家J・クリネンは、「法国家 l'État de droit」と「裁判国家 l'État de justice」の対置による「至高権 souveraineté」のありようと「近代国家の形成過程 genèse de l'Etat moderne」を、いわゆる「長期持続 longue durée」の観点から考察している。クリネンの所説によれば、盛期中世におけるフランス国王の基本的な属性は、「立法者たる国王 roi législateur」と「正す者たる国王 roi justicier」であり、両者は不可分一体の関係にある。即ち、王たる者の務めは法を制定して規範を示すばかりでなく、これを実際に適用することによって「正義を取り戻す rendre la justice」（判決を下す＝裁判を行う）ことにあり、ここから、立法と司法（＝法適用に際しての解釈 interprétation）が国王の人格において一体化していたことが窺えるとされる：J. Krynen, *L'état de justice: France, XIIIe-XXe siècle*, t.1：L'idéologie de la magistrature ancienne, Gallimard, 2009.

(238) この点については、拙稿「〝立法者 législateur〟と〝正す者 justicier〟：盛期中世フランスにおける上訴制と王権」法学研究八四巻一〇号および「自治都市トゥールーズにおける上訴制の確立とカペー朝期親王領政策の諸相」同八五巻四号を参照。